116

司法省文庫
和書
門部
三六六五號
函架
共一八冊

譯書雜類 第五七集

治十七年十一月

翻譯課

XB
S
2

譯書雜類第七集（原摘譯書二）

○目次

一公證人役場職務等ノ事
一司法警察論
一行政處分三別ノ表
一大審院考
一結社集會秘密結社法
一行政裁判

XB100
S 3
2 e

一登記税

一警察士

一再度ノ上告

一民事裁判書式

一裁判申渡ノ區別

一訴訟手續ノ種別

一高等法院

一戰政及ヒ軍事裁判所

一巴里府控訴院ノ管内民事入費

一民法目次

一法官ノ責任

一民法創立ニ付ボ氏ノ意見并ニ草按目次

一大審院ニ代言人ヲ設置スルノ議

一破毀後控訴ノ期限

一控訴上告期日限ノ猶豫

一控訴上告ノ期日

一控訴上告ノ後訴訟入費計算

司法省圖書之印

公証人役場ノ設立 共和政第十一年風月二十五日ノ布告

第一卷

公証人及ヒ公正証書ノ事

第一章

公証人ノ職務、管轄及ヒ義務

第一條　公証人トハ各人民ノ契約ヲ為スニ之レニ公正ノ官吏ノ為シタルト同一ノ性質ヲ與ヘントト欲シ又ハ與フルヲ要スル時其契約書及ヒ其他ノ証書ヲ記シ日月ヲ保正シ証書ヲ預リ副本ヲ渡シ及ヒ摘撮書ヲ記セシムル為メ設

クル所ノ官吏ナリ

第二條　公証人ハ終身其官ニ任ス

第三條　公証人ハ人民ノ求メニ應シ已レノ職ヲ行フ可シ

第四條　各公証人ハ政府ニ於テ預メ定メタル場所ニ住居ス可ク若シ之レニ背ク時ハ其公証人ヲ直チニ辞職セシモノト為シ司法卿裁判所ノ見込ヲ聽キタル上之レニ代ル可キ公証人ヲ政府ニ上申ス

第五條　控訴院所在ノ邑ニ住居スル公証人ハ訴院管轄ノ地内ニ於テ其職務ヲ行フ○初告裁判所ハ○初告裁判所ノ在ノ邑ニ居ル公証人ハ訴裁判所ノ管轄地内ニ於テ其職務ヲ行フ○其他ノ邑ニ居ル公証人ハ治安裁判所ノ管轄地内ニ於テ其職務ヲ行フ

第六條　総テ公証人ハ已レノ管轄地外ニ於テ証書ヲ記スルヿヲ禁ス若シ其禁ヲ犯ス時ハ三ケ月間其職ヲ中止シ又再犯ノ時ハ其職ヲ罷メラレ且ツ償金ノ言渡ヲ受ク可シ

第七條　公証人ノ職務ハ各裁判所ノ判事、撿事、

檢事ノ下役書記官代言人使吏直稅間稅ノ官吏
警部及ヒ糶賣人ノ職務ヲ兼ルヿヲ得ズ

第二章

公正ノ証書式正本副本摘撮書及ヒ簿冊ノ事

第八條　公証人ハ已レノ親族又ハ姻族ノ直系中ニ於テハ等級ヲ論セス傍系中ニ於テハ叔姪ノ級ニ至ル者ノ其契約中ニ管係スル時其証書ヲ記スルヿ得ス

第九條　総テ証書ハ公証人二負ニテ之ヲ記ス可ク又ハ公証人一負証據人二負ノ立會ヲ得テ之ヲ記スルモ可ナリトス但シ其証拠人ハ佛蘭西國士ノ名義ヲ有シ且ツ姓名ヲ手署スルヲ知リ公証人所在ノ地ニ住居スル者タル可シ

第十條　公証人二負ノ互ニ第八條ニ禁シタル級内ノ親族又ハ姻族ナル時ハ相與ニ同一ノ証書ヲ記スルヿヲ得ス○公証人又ハ契約ヲ為ス双方ノ親族若クハ姻族ノ第八條ニ禁セシ級内ニ在ル者又ハ公証人ノ筆生又ハ契約ヲ為ス者ノ僕婢ハ証據人トナルヿヲ得ス

第十一條　契約ヲ為ス双方ノ姓名、職業、住所ハ公証人預メ之レヲ知得ス可ク若シ然ラサレハ已レノ知得スル國士二人ノ其証拠人トナル可キ分限アル者ニ一通ノ証書ヲ作ラシメ以テ其証書中ニ契約ヲ為ス雙方ノ姓名、職業、住所ヲ保証セシム可シ

第十二條　総テ証書中ニハ之ヲ記スル公証人其姓名、住所ヲ記入ス可シ若シ之ヲ記入セサル公証人ハ百「フランク」ノ罰金ヲ言渡サル可シ○証拠人ノ姓名、住所及ヒ契約ヲ結フ時其年月日モ亦之ヲ記入ス可ク若シ之ヲ記入セサル時ハ第六十八条ニ定ムル罰ヲ受ケ且ツ其贋造ノ規則ニ適スル時ハ贋造ノ刑モ亦之ヲ受ク可シ

第十三條　公証人ノ証書ハ之ヲ一文章ニ記シ其文字ハ通讀ニ易ク、略語ヲ用ヒス、空白ヲ存セス、改竄ヲ為サヽルモノタル可ク又其証書ニハ契約ヲ為ス双方ノ姓名、字、分限、住所及ヒ第十一條ニ定メタル証拠人ノ姓名、字、分限、住所ヲ記ス可ク又其証書中ノ金高及ヒ日月ハ數字ヲ以テ之ヲ記ス可カラス又其証書ノ正本ニハ若シ其

契約ヲ為ス者ノ委任状アル時ハ之ヲ添ヘ且ツ其正本中ニハ其証書ヲ双方ニ讀ミ聞カセシ旨ヲ記ス可シ但シ此規則ニ反スル公証人ハ百フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第十四條　総テ証書ハ契約ヲ為ス双方ト証拠人ト各其名ヲ手署シ且ツ公証人ハ其文尾ニ其各人ノ姓名ヲ手署セシ旨ヲ記ス可シ○若シ又姓名ヲ手署スル能ハサル者アル時ハ其者ノ之ヲ公証人ニ陳述セシ旨ヲ其証書ノ末ニ記ス可シ

第十五條　見合及ヒ追加ノ文ハ之ヲ欄外ニ記シ其文毎ニ公証人及ヒ其他契約ニ管スル者姓名ヲ手署ス可シ若シ其手署ナキ時ハ其見合及ヒ追加ノ文ヲ効ナキモノトス○若シ追加ノ文ノ長キカ為メ之ヲ証書ノ末ニ記載スル要スル時ハ啻ニ欄外ノ追加ノ如ク其姓名ヲ手署ス可キノミナラス契約ヲ為ス双方ノ其文ヲ可トセシ旨ノ明文ヲ記ス可シ若シ之ヲ記セサル時ハ其追加ノ文ヲ効ナキモノトス

第十六條　証書中ニハ宣字宣行アル可カラス

若シ重字重行アル時ハ其重字重行ノ効ナキ者トス○塗抹シタル文字ハ其字数ヲ欄外或ハ証書ノ末ニ記シ欄外ノ見合文ト同シク其姓名ヲ手署ス可ク若シ公証人ノ之ヲ為サヽル時ハ五十「フランク」ノ罰金ヲ言渡サレ且ツ契約ヲ為ス者ニ對シ償金ヲ拂フ可シ但シ公証人詐偽アル時ハ其職ヲ罷メラル可シ

第十七條　從前用ヒシ封建ニ属スル名義言語ヲ廃シ及ヒ度量ノ名稱ヲ廃セシ政府ノ布告ニ循ハサル公証人ハ百「フランク」ノ罰金ヲ言渡サレ再犯ノ時ハ之レニ倍スル言渡ヲ受ク可シ

第十八條　公証人ハ其役場ニ一箇ノ表ヲ懸ケ其表中ニ已レノ管轄地内ニ住居スル人民中ニテ治産ノ禁ヲ受ケタル又ハ裁判所ヨリ輔佐人ヲ仕セシ者ノ姓名、分限、住所及ヒ之レカ為メ言渡シタル裁判書ノ寫ヲ記載ス可シ但シ此手續ハ其裁判言渡ノ送達ヲ受ケタル時ヨリ直チニ之ヲ為ス可ク若シ此手續ヲ為サヽル時ハ契約ヲ為ス双方中ヨリ償金ヲ要ムルヿヲ得可シ

第十九條　総テ公証人ノ証書ハ裁判上ニ於テ

真正ノモノト信拠シ佛蘭西全國内ニ之ヲ執行ス可シ○然レ𪜈其証書ニ付キ贋造ノ訴ヲ主トシテ為シタル者アル時ハ原告陪審官ノ之ヲ審判ス可シト云ヘル決定ニ因リ其証書ノ執行ヲ中止シ若シ又其贋造ノ訴ヲ従トシテ為シタル時ハ事實ノ軽重ニ從ヒ裁判所ニ於テ假リニ其証書ノ執行ヲ中止スルヿヲ得

第二十條　公証人ハ其記シタル総テノ証書ノ正本ヲ已レニ保存シ置ク可シ○然レ𪜈生存ノ証書、委任状、作賃ノ受取書、家屋貸賃ノ受取書、養育料及ヒ年金ノ受取書ハ此限ニ非ス

第三章　取締局

第五十條　取締局ハ公証人ノ内部ノ取締ノ為メ之ヲ設ケ其規則ハ政府ノ規則書ヲ以テ之ヲ定ム

第五十一條　公証人ノ職務ノ時間及ヒ謝金ハ公証人ト契約ヲ為ス者トノ相對ヲ以テ之ヲ算定ス若シ共議ヲ以テ定メサル時ハ初告裁判所ニ於テ取締局ノ見込ヲ聽キタル上之ヲ判斷ス民事訴訟ノ費用表ノ第百七十三条見合

（費用ノ願書ノ出ル初告裁判所ニ）

第五十二條　總テ職務ヲ中止セラレ或ハ其職

ヲ免セラレ或ハ其職ヲ辞セシ公証人ハ其中止免職辞職ノ言渡ヲ受ケシ日ヨリ其職務ヲ行フヲ禁ス若シ此禁ヲ犯ス時ハ償金ト総テ免職辞職又ハ職務中止ノ言渡ヲ受ケシ官吏ノ其職務ヲ行ヒシ時出ス可キ罰金ト同一ノ罰金ヲ出ス可シ○職務ヲ中止セラレシ公証人ノ其中止期限ノ未タ終ラサル前ニ再ヒ其職務ヲ行ヒシ時モ亦同上ノ刑ヲ受ク可シ

第五十三條　公証人ノ職務ヲ中止シ又ハ其職ヲ免シ及ヒ罰金償金ノ言渡ハ其事ニ管係アル者ノ求メニ因リ或ハ検事ノ求メニ因リ公証人住居ノ初告裁判所ニ於テ之ヲ為ス可シ○右等ノ言渡ニ付キ公証人ニ控訴ヲ為スハ之ヲ許スト雖モ罰金及ヒ償金ノ言渡ヲ除クノ外ハ仮リニ之ヲ執行ス可キモノトス

第四章

証書ノ正本ヲ保有スル事ヲ他人ニ譲リ渡ス事及ヒ其正本ノ表ヲ作ル事

第五十四條　免職或ハ辞職シタル公証人或ハ

其役場ヲ廃セラレシ公証人ノ所持スル証書ノ正本及ヒ簿冊ハ本人或ハ其相續人之ヲ同邑ニ住居スル公証人ニ渡ス可シ但シ同邑中ニ別ニ公証人ナキ時ハ之ヲ同縣内ノ公証人ニ渡ス可シ

第五十五條　免職或ハ辞職シタル公証人其所持スル証書ノ正本及ヒ簿冊ヲ前條ニ任セ引渡サスシテ跡継人ノ於一月間ニ前條ノ引渡ヲ為サル時ハ心ス其人ニ為ス可シ

第五十六條　公証人ノ役場ヲ廃シタル時ハ本人或ハ其相續人其役場ヲ廃セラレシ日ヨリ二月間ニ其証書ノ正本ト簿冊トヲ同邑ノ公証人又ハ第五十四条ニ循ヒ同縣ノ公証人ニ引渡ス可シ

第五十七條　初告裁判所属ノ検事ハ前數条ニ記シタル引渡ヲ為シタルヤ否ヤヲ監督ス可ク且ツ検事ハ其役場ヲ廃セラレシ公証人又ハ其相續人ノ定期内ニ其所持スル証書ノ正本及ヒ副本ヲ引渡ス可キ公証人ヲ擇ハサル時ハ之ヲ引渡ス可キ公証人ヲ擇ム可シ○第

五十五条及ヒ第五十六条ノ規則ヲ循守スル
ニ遲延セシ公証人又ハ相續人ハ撿事ノ其引
渡ヲ催促セシ日ヨリ其遲延一ケ月毎ニ百フ
ランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第五十八条　何レノ場合ニ於テモ新タニ証書
ノ正本ヲ引受ケシ公証人ハ其正本ノ目録ヲ
作リ其副本ヲ取締局ニ送付ス可シ

第五十九条　故トノ公証人或ハ其相続人ト第
五十四条第五十五条第五十六条ニ循ヒ正本
ヲ受取ル可キ公証人トハ双方ノ示談ヲ以テ
未タ其得意先ヨリ拂ハサル手數料ノ証書ト
証書送達ノ手數料トノ算計ヲ定ム可シ○若
シ示談ヲ以テ之ヲ定ムル能ハサル時ハ双方
ニテ各一員ノ公証人ヲ撰ミ或ハ裁判所ヨリ
同地ニ住居スル公証人二員ヲ撰ミ若シ又同
地ニ公証人ナキ時ハ近傍ニ住居スル公証人
二員ヲ撰ミ之レニ其算計ヲ為サシム可シ

第六十条　總テ契約局書類局ノ名称ヲ用ヒ或
ハ其他ノ名称ヲ以テ証書ノ正本ヲ一纏ト為
シ公証人中ノ一人ヲ撰ミ之ヲ附托スル者ア

ル時ハ其証書ノ副本及ヒ摘撮書ヲ其附托ヲ受ケシ公証人ヨリ渡ス可シ○然レモ此等ノ書類ヲ裁判所ノ書記局ニ附托シタル時ハ其副本及ヒ摘撮書ヲ渡スノ権ハ書記庭ニ在リトス

第六十一条　公証人又ハ其他証書ノ正本ヲ所持スル者ノ死去スル時ハ治安裁判官直チニ其正本及ヒ簿冊ニ封印ヲ為ス可シ但シ其封印ハ初告裁判所長ノ命令ニ因リ假リニ其正本及ヒ簿冊ヲ他ノ公証人ニ引渡スニ至ル迄ハ之ヲ除去ス可カラス

千百四十三年六月二十一日布告公正証書ノ書式改革ノ法

第一条　共和政第十一年凡月廿五日ノ法布告以後ニ記シタル公正ノ証書ハ第二ノ公証人或ハ二人ノ証拠人ノ其証書ヲ記スル場ニ出席セサルヲ以テ之ヲ取消スヿヲ得ス

第二条　向後ハ生存中ノ贈遺、夫婦間ノ贈遺、贈遺ノ取消、遺嘱贈遺ノ取消、私生ノ子ト認ムル為メノ公正ノ証書又ハ右等ノ証書ヲ作ルカ為メ附與セシ委任状ハ公証人ニ負列席シ又ハ公証人一員ト証拠人二負ノ面前ニテ作リシモノニ非サレハ其効ナシトス○但シ第二ノ公証人或ハ二員ノ証拠人ハ公証人ノ其証書ヲ契約ヲ為ス雙方ニ讀ミ聞セ其双方ノ之レニ姓名ヲ手署スル時ニ限リ必要ノモノトス公証人ハ第二ノ公証人又ハ二員ノ証拠人ノ其席ニ立會シ旨ヲ証書ノ末ニ記ス可ク若シ之ヲ記セサル時ハ其証書ノ効ナシトス

第三条　其他ノ証書ハ從前ノ如ク共和政第十一年凡月廿五日ノ法ノ第九条ニ拠ル可シ

空行ヲ不要

第四条　遺嘱ノ贈遺ノ書式ハ常ニ民法ノ規則ニ循フ可シ

一ノ紙

第廿一條　証書ノ副本及ヒ摘撮書ヲ記スルノ権ハ其正本ヲ所持スル公証人ノミニ在リトス但シ自カラ証書ヲ記セスト雖ヒ他人ノ記シタル証書ノ正本ヲ所持スル公証人ハ其寫ヲ記スルヿヲ得

第廿二條　証書ノ正本ハ法律ニ於テ定メタル場合又ハ裁判言渡アル時ニ非サレハ公証人之レヲ手放スヿヲ得ス○但シ之レヲ手放スニハ先ツ別ニ寫ヲ記シ其姓名ヲ手署シテ裁判所長ト検事ノ検査ヲ受ケ正本ノ返リ来ル

迫其正本ニ代用ス

第廿三條　公証人ハ初告裁判所長ノ命令アルニ非サレハ契約ヲ結セシ双方又ハ其相續人及ヒ其他其契約ニ管係アル人ノ外証書ノ摘撮昏ヲ渡シ或ハ之ヲ示スヿヲ禁ス若シ此禁ヲ犯ス時ハ償金及ヒ百「フラン」ノ罰金ヲ言渡サレ再犯ノ時ハ三年間其職務ヲ中止セラル可シ但シ登記稅ノ事ニ管スル法律及ヒ規則又ハ裁判所内ニ公告ス可キ証昏ニ管スル法律及ヒ規則ヲ執行スル爲メ公証人ノ摘撮書ヲ記スルハ格別ナリトス

第二十四條　裁判所ニテ証書ノ正本ノ取調ヲ言渡ス時ハ公証人調昏ニ其旨ヲ記ス可シ但シ判事中ノ一人或ハ公証人ノ出席シテ其取調ヲ爲ス時ハ別段ナリトス

第二十五條　執行ノ文ヲ加記シテ渡スモノハ獨リ副本ノミトス故ニ副本ハ裁判言渡書ト其首尾ノ文体ヲ同ウス

第二十六條　正本ノ上ニハ最初契約ニ取掛ル各人ニ其副本ヲ渡セシ旨ヲ記ス可ク其後ハ

初告裁判所長ノ命令アルニ非サレハ別ニ副本ヲ渡スヲ可カラス若シ之レヲ渡ス時ハ其裁判所長ノ命令書ヲ其正本ニ添ヘ置ク可シ○若シ此條ノ規則ニ背ク公証人ハ其職ヲ罷メラル可シ

第二十七条　總テ公証人ハ全國一体ナル佛國政府ノ記號アリテ已レノ姓名分限住居ヲ記シタル印章ヲ所有ス可シ○証書ノ副本及ヒ摘撮書ニハ必ス此印章ヲ付ス

第二十八条　控訴院所在ノ地ニ住居スル公証人ノ管轄地外ニ於テ用ユル時及ヒ其他ノ公証人ノ証書ヲ其公証人住居ノ列外ニ於テ用フル時ハ公証人住居ノ地ノ初告裁判所或ハ其副本又ハ摘撮書ヲ送達スル地ノ初告裁判所長右等ノ証書ニ認メ印ヲ押ス可シ

第二十九条　公証人ハ已レノ記セシ証書ヲ総テ一ノ簿冊ニ記載ス可シ

第三十条　其簿冊ニハ公証人住所ノ初告裁判所長又ハ判事其毎葉ニ番号ヲ附シ横線ヲ畫ス可シ○又其簿冊中ニハ総テ証書ノ月日種

類ト双方ノ姓名ト登記局ニ記入シタルヤ否ヤトヲ記載ス可シ

第二卷

公証人役場ノ事

第一章

公証人ノ員數住所及ヒ保証金ノ事

第三十一条　各州内ノ公証人ノ數及ヒ其住所ハ政府ニ於テ之レヲ定ムル左ノ如シ

第一　住民十万人以上ノ邑ニ於テハ六千人毎ニ公証人一員ヲ置ク

第二　其他ノ邑或ハ村落ニ於テハ治安裁判官ノ一管轄下毎ニ少クトモ二人多クトモ五人ヲ置ク

第三十二条　公証人ノ役場ハ公証人ノ死去辞職又ハ其職ヲ罷メウルヽニ非サレハ其數ヲ減セス

第三十三条　公証人其職務ヲ行フニハ免許ヲ要セスト雖モ政府ニ於テハ保証金ノ高ヲ定メテ之ヲ取置キ以テ公証人ニ其職務上ノ過

失ニ因リ裁判所ヨリ罰金又ハ償金ヲ言渡シタル時之ヲ執行スル為メノ用ヲニ備フ○其保証ノ金高ノ全部ヲ罰金又ハ償金ノ為メニ使用シタル時ハ其保証金ヲ原額ノ如ク備フルニ至ル迄之レカ職ヲ中止ス但シ其保証金ノ全部ヲ六ケ月内ニ備ヘサル時ハ之ヲ辞職セシ者ト看做シ別ニ公証人ヲ命ス

第三十四条　保証金ノ高ハ公証人住所ノ土地ト其管轄地内ノ事務ノ多少トニ因リ政府ニ於テ之ヲ定ムム○此保証金ヲ出スヿ又ハ政府ヨリ其利子ヲ拂フ事及ヒ之レヲ返還スルヿハ總テ保証金ノ法ニ循フ保証金ノ表ヲ見ルベシ

第二章

公証人トナルニ必要ナル條件及ヒ公証人ニ命セラルヽ方法

第三十五条　公証人ノ職務ヲ行フニハ左ノ条件ヲ備フ可シ

第一　國士ノ權ヲ行フ可キ者タル事

第二　徴兵ノ規則ニ從フタル事

第三　満二十五歳以上タル事

第四　次ノ條中ニ定ムル時間其業ノ見習ヲ為シタル事

第三十六条　見習ノ期限ハ之ヲ満六年トシ其期限中間斷ナク其業ヲ為ス可ク且ツ其最終ノ二年中少クモ一年間ハ已レノ現ニ勤メント欲スル級ト同級ノ公証人ノ役場ニ一等筆生ヲ勤ムルヲ要トス但シ次ニ記スル変則ノ場合ハ此限ニ非ス

第三十七条　公証人トナルヲ欲スル者若シ其要スル級ヨリ上等ノ級ニ居ル公証人ノ役場ニ三年間筆生ヲ勤メ四年目ニ至リ其要スル級ヨリ上等ノ級又ハ同等ノ級ニ居ル公証人ノ役場ニ一年間一等生ヲ勤メタル時ハ其見習ノ年限四年ヲ以テ足レリトス

第三十八条　一年前ヨリ既ニ公証人トナリ其職務ヲ行フ者ノ已レノ級ヨリ上等ノ級ノ役場ニ移ラントト欲スルニハ総テ見習ヲ為スニ及ハス

第三十九条　公証人トナルヲ欲スル者間断ナク四年間一級又ハ二級ノ公証人ノ役場ニ筆

生ヲ勤メ其後少クモ二年間民事裁判所ニ於テ代言人或ハ代昏人ヲ勤メ且ツ其最終ノ二年中ノ一年已レノ要スル級ト同級ノ公証人ノ役場ニ一等筆生ヲ勤メタル時ハ其級ニ等シキ公証人トナルヿヲ得可シ

第四十条　又公証人トナルヲ欲スル者已レノ勤メシ役場ノ級ヨリ上等ノ級ヲ要スル時ハ亦ノ數条ニ定メタル見習期限ノ時間ノ三分一ヲ別ニ増ス可シ

第四十一条　第三級ノ公証人トナルニハ三年間第一級或ハ第二級ノ公証人ノ役場ニ勤メシヲ以テ足レリトシ又ハ控訴院若クハ初告裁判所ニ於テ二年間代言人或ハ代昏人ヲ勤メ更ニ一年間公証人ノ役場ニ勤メシヲ以テ足レリトス

第四十二条　行政ノ職務及ヒ司法ノ職務ヲ行ヒシ者ノ為メニハ政府ニ於テ見習時間ヲ要スルニ及ハサル旨ヲ許スヿアリ

第四十三条　公証人トナルヲ欲スル者ハ已レノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄内ニ在レ取締局

ニ至リ品行及ヒ知識ノ保証状ヲ求ム可シ○
此保証状ハ取締局ニ於テ其共議セシ始末書
ヲ初告裁判所ノ検事ニ送達セシ上ニ非サレ
ハ之ヲ渡ス可カラス

第四十四条　取締局ニ於テ保証状ヲ渡スヲ許
サヽル時ハ一通ノ見込書ヲ作リ其中ニ之ヲ
許サヽル原由ヲ記シ以テ初告裁判所ノ検事
ニ送リ検査ハ已レノ見込書ヲ添ヘテ之ヲ司
法卿ニ呈ス

第四十五条　公証人ハ大統領ヨリ之ヲ命シ其
拝命書中ニハ其公証人ノ住居ス可キ場所ヲ
定ム

第四十六条　公証人ノ拝命書ハ政府ヨリ其寫
ヲ拝命者ノ住居ス可キ土地管轄ノ初告裁判
所ニ送達ス

第四十七条　公証人ハ其拝命ノ日ヨリ二ケ月
内ニ拝命状ヲ渡シタル裁判所ノ訟庭ニ至リ
総テ判事ノ為ス可キ誓詞ニ齊シク已レノ正
實ニ其職務ヲ行フ可キ誓詞ヲ為ス可シ若シ
之ヲ為サヽル時ハ拝命ノ効ナシトス○拝命

者ハ拝命状ノ正本ト保証金ヲ納レタル受取
昏トヲ携ヘ行クニ非サレハ右ノ誓詞ヲ為ス
ヲ許サス○裁判所ニ於テハ其誓詞ヲ為シタ
ル始末書ヲ記シ拝命者ハ其始末書ヲ携ヘ已
レノ住居セントト欲スル地ノ邑廳ノ書記局及
ヒ已レノ職務ヲ行フ土地管轄ノ諸裁判所ノ
昏記局ニ至リ之ヲ登記セシム可シ

第四十八条　拝命者ハ誓詞ヲ為シタル日ヨリ
始メテ其職務ヲ行フノ権アリ

第四十九条　公証人ハ其職務ヲ行フ前ニ先ツ
其列内ニ在ル各初告裁判所ノ書記局ニ至リ
又住所ノ邑廳ノ昏記局ニ至リ已レノ姓名ノ
手署ト横線ノ記号トヲ届ケ置クノ可シ○控訴
院所在ノ地ニ在ル公証人ハ談院ノ外更ニ其
控訴院管轄内ニ在ル総テノ初告裁判所ノ書
記局ニ同上ノ届ヲ為ス可シ

第一款総論 ダローズ辞書摘訳

〔二百三十七〕 治罪法ノ第九條ニ曰ク司法警察ノ事ハ控訴院ノ監督ヲ受ケ田野ノ監守森林ノ監守儼卒長邑長及ヒ副邑長撿事及ヒ其代役治安裁判官備警兵ノ士官儼卒總長下タ吟味裁判官ニテ後ノ數條ノ規則ニ從ヒ之ヲ行フ可シト

○該條ニ於テハ司法警察ノ諸官吏ヲ皆ナ同等ニ置クカ如シト雖モ各官吏ノ權限同一ナラサル者多ク且ツ其管轄スル土地ニモ各〻廣狹ア

ルヿ後ニ於テ見ル可シ○司法警察ノ任アル官吏ハ該條ニ記シタル人々ノミナラス加ルニ治罪法制定ノ後時々布告ノ法律ヲ以テ此任ヲ受ケタル者少ナカラサルヿ是亦後ニ於テ委ク論セン

〔二百三十八〕第九條ニ記シタル官吏ノ内ニテ其最モ職掌ノ廣キ者ハ下タ吟味裁判官是ナリ○下タ吟味裁判官ハ司法警察事務ノ全權ヲ有シ其事務ヲ行フニ當リ上官ノ命ヲ待タス已レ一人ノ權ニテ悉クヿ之ヲ行フ而メ司法警察ヲ務ムル他ノ官吏ハ或ハ下吟味裁判官ノ補佐ナリ或ハ其代理ナリトスヿ可クシテ此官吏等ト此裁判官トノ間ニ權限ノ抵觸スルヿ決メ有ル可カラサルナリ（治罪法六十一条七十五十八条見合セ）○被害者ヨリノ告訴告発及ヒ重罪軽重ニ関スル証書等ヲ受取リ犯罪場所ニ親臨シ始末書ヲ調ヘ証人ノ口述ヲ聞キ犯罪人ヲ捕縛シ犯罪ノ場處及ヒ死人傷人ノ模様ヲ見届クル為メニ檢相人ヲ申付ケ家宅ノ探索ヲ為シ時ニヨリ公力ノ助ケヲ請求スルヿ是レ下タ吟味裁判官職掌中其主タル

事務ノ大略ナリ○其詳細ニ於テハ後ニ於テ再ヒ論セン（三百九十五号及ヒ次号見合セ）

二百三十九

検事及ヒ其代役ハ相共ニ司法警察ノ事ヲ掌トル代役ハ之ヲ務ムルカ為メニ検事ヨリ委任ヲ受ク可キナリ○然ルニ千八百四十年七月三日ノ法ニテ定ムルニハ凡テ検事ノ代役ハ其列ヲ論セス警察事務ヲ行ナフ權アリ之ヲ行フテ検事ヨリ枕抵ヒサルキハ暗ニ検事ノ委任ヲ受ケテ之ヲ務ムル者ト看做ス可シ

二百四十

検官（検事ト其代役ノ司法警察ニ関ストヲ通称ス）

ル職掌ハ現行犯罪ノ場合ト非現行犯罪ノ場合ニ依テ之ヲ行フニ差違アリ○夫レ通常検官ノ警察ニ関スル事務ハ訴罪状ヲ裁判所ヘ出スニ止マルト雖モ其犯罪現行ナリ或ハ現行ニ準スル時検事暫ク訪察事務ノ中其至急ナル手續ヲ行フノ權ヲ有ス○然ルモ通常ノ犯罪ニ於テ検官ノ司法警察ニ於ケル職掌ハ重罪及ヒ軽罪有リシ件之ヲ探索シ之ヲ発訐スル為メノ報告等ヲ受取リ（治罪法十八条二十条二十二条二十九条三十条三十一条五十三条五十四条六十四条見合セ）或ハ時ニヨリ訪察ヲ（治罪法四十七条五十三条五十六条六

十四条見合セ始ムルヿヲ下タ吟味裁判官ニ請求シ其他裁判ニ及ブ迫ニ必用ナル手續キヲ申立ルニ在ルノミ

〔二百四十一〕 檢官及ヒ下タ吟味裁判官ハ凡テ法律ニテ重罪或ハ軽罪ト名ケタル事件ニ於テ各々其職ヲ務ムルヲ得但シ非常ノ裁判ニ属スル犯罪ハ別ニ之ヲ受理スル法アリ又之レヲ管轄スル官吏アリ

〔二百四十二〕 治安裁判官。備警兵ノ士官。邑長副邑長。儸卒長。ハ檢事ヲ補佐スル警察官吏ナリ○現行犯罪有リ又ハ一家主ノ請求ヲ受クルトキハ始ヿ書ヲ認メ及ヒ其他此等ノ場合ニ於テ臨時ニ下タ吟味裁判官ノ權内ニ入ルヿヲ為シ其認メタル書類ハ直チニ之ヲ檢事ニ引渡ス可シ治罪法四十九條五十三条見合セ○然ルニ現行犯罪ニ非サルトキニ談官吏ノ警察事務ヲ行フヤ重罪及軽罪ノ報知発訐ノ書類ヲ受ケ直ニ之ヲ檢事ニ送達スルニ在ルノミ治罪法二十九條四十八条五十条五十四條見合セ

〔二百四十四〕 治安裁判官重罪及ヒ軽罪有ルヲ知リタル片之ヲ檢事ニ報告スルハ已レ司法警

察ノ官吏タルヲ以テナリ又人民ノ告発ヲ受取リ及ヒ現行犯罪ニ當テ訪察ノ手続ヲ始ムルハ検官ノ補佐タルヲ以テナリ其外下タ吟味裁判官或ハ検事故障有リテ親カラ務ムル能ハサル件司法警察ノ事務或ハ糺問ノ事務ヲ行フ事ヲ治安裁判官ニ委任スルヿアリ（治罪法五十二条八十三条八十四条見合セ）○治安裁判官ハ邑長副邑長儷卒長ノ如ク詿誤罪ノ事件ヲ証告スルノ権ナシ何トナレハ談裁判官ハ即チ詿誤裁判所ニ於テ親カラ其事件ヲ裁判ス可キ者ナレハナリ○又談裁判官時ニ依リ下タ吟味裁判官ノ補佐トナリ糺問事務ニ加ルヿアリ

〔二百四十五〕 治安裁判官ハ已レ管轄スルカントン（一列ヲ分ツテ數郡ヲ置ク一郡ヲ分ツテ數縣カントンヲ置ク一縣ヲ分ツテ數邑ヲ置ク）内ニ於テ警察ノ職掌アリ○若シ人民ヨリ報知シタル事件已レノ管轄カントン外ニ在ル者ハ其管轄官吏ノ面前ニ送リ（報知人ヲ）且検事ニ其事ヲ報告ス

〔二百四十六〕 儷卒長ハ行政警察ト司法警察トヲ兼スル官吏ニシテ検事ノ補佐ナリ又詿誤裁

判所ニ於テ検官ノ事務ヲ取リ刑事ノ原告トナル治罪法九条四十八條百四十四条見合ヒ○第九条ニ所謂ル儸卒総長ナル者ハ千八百十五年三月二十七日ノ布告ニテ之ヲ廃ス○其後都府ニ於テハ中央儸卒長壱人ヲ置キ以テ其他儸卒長ノ事務ヲ指揮セシム然ルトキハ其他職掌ハ通常ノ儸卒長ト異ナルヿナシ○又千八百五十二年ノ布告ニテ儸卒長ヲシテ同シカントン内ニ在ル諸邑ヲ悉ク管轄セシムルヿヲ制定ス

二百四十七　邑長副邑長ハ其質行政ノ官吏ナレトモ又司法警察官吏タリ治罪法九条又検事ノ補佐官ナリ四十五条治安裁判官註誤罪ヲ裁判スルニ當リテ検官ノ職ヲ務ム百四十四条又同シカントン内治安裁判官ノ有サル邑ニテハ自カラ註誤罪ヲ裁判ス百六十六条○此等ノ職掌ヲ務ムルニ當リテ邑長副邑長モ同シ権力アリ但邑長ノ自カラ務ムル能ハサルトキニ非サレハ副邑長之ニ代ルヿナシ

二百四十八　備警兵ノ士官ハ司法警察ノ官吏ナリ又検事ノ補佐官ナリ

〔二百四十九〕　森林ノ監守人及ヒ田野ノ監守人ハ司法警察官吏ナリ然モ檢事ノ補佐官ニ非ス

○森林ノ監守人トハ乘馬ノ者モ歩行ノ者モ共ニ之ヲ云フ○邑ニ屬スルモ公舍ニ屬スルモ各人民ニ屬スルモ政府所有ノ森林ニ屬スルモ其監守ハ皆ナ司法警察官吏ノ名ナリ（山林法九十五条九十九条見合セ）○田野ノ監守人ハ各人ニ屬スルモ公舍ニ屬スルモ政府ニ屬スルモ皆ナ司法警察ノ官吏ナリ

〔二百五十〕　大檢事ハ司法警察ヲ行フ官吏ノ列ニ加ハラス之ヲ行フ官吏ヲ監督シ之ヲ指揮スルノミ司法警察ニ関スル事務ハ通常大檢事ヲシテ自ラ之ヲ行ハシムルヿ必要ナラスト思ハルル（九条ニ十七条ニ百七十四条ニ百七十九条見合セ）○見ル可シ夫ノ千八百四十年ピヨツトノ罪人名一件ヲ重罪裁判所ニテ吟味スル際大檢事自カラ實地檢査ノ為メニ下官ニ已レノ代理ヲ命シタルヿ有リ後大審院ニ於テ此大檢事ノ所行ヲ裁判シテ曰ク法律ヨリ檢官ニ任スルニ一ニ訴罪ノ權ヲ以テスルノミ故ニ大檢事自カラ糺問ノ手續ヲ為

シ或ハ之カ為メニ司法官吏ヲ已レノ代理ト為スヤハ是レ権限ノ定規ヲ犯シ且職掌ノ順序ヲ紛乱スルモノナリトL〇然ルトキニ依リ或ハ司法官吏ノ罪ヲ追糺シ四百八十四条或ハ貨幣ノ贋造又ハ銀行札ヲ贋造シタル重罪ヲ証告スル四百六十四条カ如ク特別ノ場合ニ於テハ此定規ニ依ラサルヿアリ

二百五十一　控訴院及ヒ其他ノ裁判所司法警察ノ処分ヲ行フ事アリ〇則チ控訴院ハ司法警察ノ官吏ヲ監督スルカ故ニ治罪法ノ二百三十五条ニ依リテ官吏ノ犯罪追糺ヲ命スルノ権アリ又訟廷ニ於テ犯罪ノ事有ルトキ訴訟法八十九条九十一条九十二条及ヒ治罪法百八十一条五百〇四条見合セ又ハ既ニ犯罪人ヲ重罪裁判所ニ付シタル後更ニ証人ヲ問糺スヘキトキ三百三条又ハ証人ノ陳述誤ナリト思ハルヽトキ三百三十条又ハ民事訴訟吟味ノ間ニ裁判官書類ヲ贋造シタルノ罪有リト論スルトキ四百六十二条四百六十四条又或ハ司法官吏ニ對シテ人民ヨリ追糺ヲ求ムルトキ四百七十九条及ヒ次キニ於テハ控訴院及ヒ其他ノ裁判所臨時ニ司法警察ニ加ハルノ任アリ〇列長郡

長邑長及副邑長ハ皆ナ行政警察ト司法警察ト
ヲ行フ官吏ナルカ故已レノ職掌ヲ行フニ當テ
若シ他人ヨリ妨害ヲ受ルトキハ治罪法五百九条
ニ依リ其妨害者ニ向テ司法警察ノ処分ヲ下タ
スヲ得ルナリ

行政処分ノ三別

- 第一 一般処分
  - 辨解論 — 改正論 — 行政権（訴訟ニ非ス 効力ナリ）
  - 執行論 — 司法権
- 第二 一箇処分
  - 辨解論 — 改正論 — 行政権（訴訟ヲアリ 効力モアリ）
  - 執行論 — 司法権
- 第三 契約処分 三論皆 — 司法権（但シ立法官ノ稟ノ定メテ行政権ニ付与スルモノアリ）

大審院

上告

大審院ハ上告ヲ受ルノ一所ナリ、今先ツ覆訴ト上告ノ別ヲ知ンヿヲ要ス、凡民事ニ在テ、治安裁判郡裁判、商事裁判ノ終審限外ニ在ル者ハ、詞訟人其始審ニ服スレハ則チ已ム、服セサレハ更ニ再タヒ其上ノ裁判一所ニ訴フルヿ、初次ノ訴ト異ナルヿ無ク、法ノ廣ク許ス一所ニノミ、其上ノ裁判官ハ、其訴ノ当否ヲ論セズ受理セサルヿヲ得ス、刑事ニ在テ、警察裁判懲治裁判、其ハ軽ナル者警察裁判ノ終

審ハ罰則五布蘭以下ニ止マリ、懲治裁判ヲ終審ス
終審ハ、警察裁判ノ覆訴ノミニ止マル、
ルノ外、其上ノ裁判所ニ覆訴スルヿヲ許ス、上等
裁判所ハ、專ラ覆訴ヲ受理スルノ任ニ居リ、終審
ノ全權ヲ有シ、凡ソ其裁ヲ經タル者ハ、更ニ覆訴
スルノ所ナシ、重罪ニ至テハ、会審院ニ於テ(即重
罪裁判)陪審ノ判決ヲ取リ決放スル者、亦更ニ覆
訴スルノ所ナシ、是通常覆訴ノ限國ナリ、仏蘭西
ニ在テ、覆訴ノ外、更ニ上告法ヲ設ケ、覆訴ハ、再次
其事ヲ訟ヘテ、事情ノ申理ヲ求ムルノ謂、聽斷処
決ノ失法ヲ訟ル者ニアラズ、上告ハ、專ラ失法ヲ

論訴シ、終審ノ裁判ヲ破毀スルヿヲ求メル者故
ニ、法ノ許スところナリト云ヒ、大審院、其当否ヲ検シ
テ、或ハ受ケ或ハ受ケズ、受ケサル時ハ、罰金三百布蘭
ヲ科ス、其妄言ヲ懲ス、(猶リ重罪ハ罰金ヲ復セズ)一ニ称メ非
常覆訴トスル所以ナリ、
「アペール」神田氏訳ノ上告トシ箕作「ルケート」
神田氏訳ノ覆審ヲ乞フ者ト控訴トスル者
シ箕作氏訳ノ上告トスル者ノ別其實訳字
ニ困ム今暫ク覆訴ヲ以テ「アペール」ニ当テ上
告ヲ以テ「ルケート」ニ当ツ覆訴ハ猶再訴ト云
カ如シ

ル聽斷ノ規式ハ、一々法章ニ掲ケシ、及ヒ論決ハ必律條ニ據ル、若シ法官聽斷ノ規式ヲ破リ、及論決、法律ニ違フ者アレバ、則チ裁判ノカナシ、已ニ終審ヲ經タル者ト云ヒ、皆大審院ニ上告スルヿヲ得、大審院ハ、覆訴ヲ受ケスノ、獨リ上告ヲ受ルノ所ナリ、其支ノ虛實ヲ推窮スルニアラスノ、專ラ其法ノ当否ヲ審閲スルノ所ナリ、全國法律ノ統一ヲ主持スルノ所ニノ、各人ノ争言ヲ判理スル者ニアラサルナリ、故ニ事ノ大審院ニ上告スル者、大審院之ヲ審閲シ、果ノ其法ニ違フ者アル

ヿヲ判スレバ、則前ノ已決裁判ヲ破毀シテ、未決ノ者トナシ、更ニ其事按ヲ以テ、它ノ裁判所ニ下シテ（先ニ郡裁判所ニ在テ已決シタル者ナレハ又它ノ郡裁判所ニ下シ先ニ上等裁判ニテ已決シタル者ナレハ又它ノ上等裁判ニ下ス）覆審裁決セシム、大審院ハ自ラ聽理シ及裁斷スルノ事ニ當ルヿ無シ、千七百九十一年七月大審院ノ規程ヲ定ムルノ令ニ曰、大審院ハ、通常裁判覆訴ノ遞上等級ニアラサルナリ、各等裁判ヲノ永久法ヲ報テ失遺セサラシムル為ニ設ケタリト、大審院、原名「クールトカスサシオン」、「カスサシオン」トハ、成事ヲ破毀スルノ名、已決

ノ裁判ヲ破毀メ、之ヲ更正スルニ耿ル、全國只一院ヲ設ク、巴里府ニ在リ、

旧譯、覆審院トス、覆審トハ猶再審ト云ガ如シ、佛蘭西ニ在テハ、覆訴上告ノ分別アリテ、家上法院ハ、破毀ノ任ニ居リ、再審ノ任ニ居ラズ、和蘭ノ家上法院覆訴上告ヲ無ヌル者ト同カラズ、故ニ改メテ大審院トス、

覆審平翻ノ法、由テ来ル久矣、古昔ハ、國王自ラ諸部人民ノ越訴ヲ受理シ、訟獄ノ權ヲ統攬シ、千三百〇二年、始テ巴里門ヲ設ケ、全國ノ越訴ヲ受クルニ及テ、更ニ巴里門ノ裁決亦錯悞ナキヲ保タサルヲ以テ、其裁ニ服セサル者ハ、直チニ王ニ訴ヘ恩赦ヲ乞フヲ得セシメ、王自ラ巴里門ニ臨テ、其覆審ヲ視ル、「是現今刑人赦ヲ請フノ初ナリ」其恩ヲ乞フノ願疏ヲ參議負(コンセーユ)(ドゥ)(ラ)(ス)(ヒ)(ヨ)(ン)議院ノ議ニ付ス、或ハ巴里門ニ受付スル者ヲ上告長(ヨ)今國義院中猶其官トス、此時未タ存ス

覆訴上告ノ別アラズ、其後王絶ヘテ自ラ巴里門ニ臨視セズ、專ラ其参議員ニ委任シ、参議員王ノ親臣ヲ以テ、平翻ノ権ヲ持シ、巴里門ヲ牽制メ、其論決ヲ破毀シ、轉タ相侵冒セリ、千五百四十五年ニ、始テ其権ヲ分チ、巴里門ハ專ラ事情ノ寃屈ヲ聽理シ、参議員ハ、論決、法ニ違フ者ヲ監閲ス、略現今大審院ノ務ノ上等裁判所ニ異ナルノ状ニ同シ、革命ノ翌歳千七百九十年ニ至テ、大裁判所ヲ置キ、参議員ノ干冒ヲ除キ、始テ司法権ヲ判然猶立スルヿヲ得セシメタリ、此時分テ二局トス、曰上告曰破棄、千七百九十三年、更ニ分テ上告及民事刑事ノ三局トシ、千八百四年、改メテ大審院ト号シ、其裁判官、改メテ評事官ト名ケタリ、加フルニ美名ヲ以テスルナリ、

右大審院大代言官「ブランシ」氏ノ説ヲ約ス、

大意

凡裁判官ノ裁判宣告ハ、特立メ曲クベカラサルノカヲ有シ、國王ト云ヒ、赦典ヲ除クノ外、敢テ私ヲ以テ之レヲ破毀スルヿ能ハズ、獨リ大審院ハ、諸裁判ノ裁判宣告ヲ破毀スルヿヲ得、何トナレハ、裁判ノ曲クヘカラサル所ノ者ハ、其法ヲ執ルヲ以テナリ、若シ裁判官聽斷ノ際、法ニ於テ定ムル所ノ定規（即チ詞訟法治罪法）ニ違ヒ、及其論決法（民法刑法）ニ違フ者アレハ、裁判ノ名ヲ冒スト云ヒ、其ノ実裁判ノ義ナシ、是最上法院アリテ、之ヲ破毀消抹セザル

「ヲ」得サル所以ナリ」、各裁判所地方ニ分在シ、各々其所管ヲ異ニシ、各法官、法ヲ論スル「亦其見ル所ニ任ス、若シ泛然トヲ統一スル所無リセハ、往々将ニ異同錯迕、端緒百出、各土ノ慣習ニ浸漸メ、昔時各部制ヲ殊ニスルノ執ニ復ラシトスル「遠カラザラントス、是又上等法院、全國ノ標準トメ、法章ヲ申明シ、失謬ヲ糾正セサルヲカラサル所以ナリ」、抑々成按ヲ破毀シ、失繆ヲ糾正スル「、是ヲ政府ニ属セズメ、是ヲ大審院ニ付スル者ハ、亦司法権ノ獨立ヲ保持スル所以ナリ、

右「ハンリーユルヲ」氏ノ説ニ据ル、「コルヲ」氏、旧裁判官、今議院代人タリ 按ニ大審院ノ務、大綱二トス、曰破案（カスサンオン）、曰明法（アンテルプレタシヨンデロア）、然ルニ其実ハ二ノミ、蓋佛蘭西ノ制、上告アリテ、疑讞ナシ、裁判官タル者、聽断ニ臨ミ、必其見ル所ヲ以テ、便即處決シ、律文明ヲ缺ク者ト律ニ係ナキ者ト同カラズト云ヘ「、遅疑ヲ欠ク者、延愓メ、裁理セザル「ヲ得ズ、是上讞ナキ所以ナリ、其過悞失錯アルニ至テ、下ニ代言人アリ、上ニ目代アリテ、交互上告ノ遺スナシ、大審院上告ヲ伸理スルハ、即チ法律ノ申

明スル所以ニノ、亦上讞ヲ待テ始テ條例ヲ
比附スルニ非ルナリ、

例權

明法沿革

法律ノ文、往々簡短ニノ、疑似両通スル者アリ、故ニ法ヲ擬シ律ヲ論スル者、迷謬ナキヲ保ツ能ハズ、是レ明法ノ已ムベカラザル所以ナリ、「原語アンテルプレタレオンデ、ロア」法章ヲ疏明スルノ義 明法ニ二類アリ、法アンテルプレタレオントヲ申ヘテ既ニ訴フルノ事ヲ断スルハ、裁判官ノ任タリ、是レ專断其事ニ止マリ、以テ一定ノ條章トノ未来ニ例推権スルヿヲ得ス、法アテルプレタレオン、レバレスヲテロルヲ申ヘテ一定ノ條例トシ、以テ將来ヲ待チ、國民ヲノ遵守セシムルハ、立法官ノ務ナリ、羅馬ノ語ニ曰、法ヲ明ニスルハ、法ヲ

甲ノ注ヲ脱シタルニ依リ

作ル者ニ在リト、是立法官ノ明法ヲ云ナリ」佛蘭西ニ於テ、古昔王家自ラ明法ノ權ヲ有セリ」千七百九十一年、大裁判所（即大審院）ヲ立テ、凡各裁判所、論擬法ニ當ラザル者ハ、大裁判所、之ヲ破毀ノ、它ノ裁判所（甲）ニ付シ再按セシム、其裁判所（乙）之ヲ裁決スル丁、初ノ裁判所（甲）ニ同キ時ハ、更ニ之ヲ破毀ノ、又其它ノ裁判所（丙）ニ付ス、其裁判所モ亦前ノ裁決ニ同キ時ハ、仍ホ上告スト云ヒ、大裁判所更ニ破毀スル丁ヲ得ズ、議院（コールレジスラチフ）ニ移ノ決ヲ受ケ、施行ス、是明法ノ任ヲ以テ議院ニ屬シタルナリ」千八百〇七年、那破倫氏、明法ノ權ヲ國議院ニ歸ス、論者盛ニ其立法及司法ノ權ヲ侵奪スル丁ヲ謗レリ」（國議院ハ行政權ニ屬ス）千八百二十八年ノ法ニ於テハ、大審院ヨリ第三次ノ送付ヲ受ケテ覆審スル所ノ上等裁判所（丙）ハ、其裁判官、合員會議式ヲ以テ、慎重ヲ加ヘ論決シ、大審院更ニ破毀スル丁ヲ得ズ、又其事ヲ王ニ奏具シ、王ヨリ議院ニ付ノ議定セシヲ以テ將来ノ條例トシ、頒布遵行セシム、即チ羅馬ノ法ニ依ルナリ、然ルニ其弊大審院ト上等裁判所トノ間、爭議止マズノ歸一スル所ナク、疑讞

日ニ繫ク、其實多ク明瞭知リ易キ者ニ過キザル而已」千八百三十七年四月一日ノ新法ニ至テ、第三次ノ覆審ニ當ル所ノ上等裁判所ハ、大審院ノ旨ヲ奉承シ論定セレム、議院ニ承ケズ始メテ大審院ヲ專ラ明法統一ノ任ニ當ラレメ、更ニ議院ニ議ヲ取ルヿヲ假ラザレノタリ、

右「アンリー、セリエ」氏ノ説ヲ直譯ス、「セリエ」氏代言人ヲ以テ大学士タリ又其論ニ云、明法ノ將来ヲ定ムルハ、立法ニ屬スト、是レ理アルノ説ナリ、抑々今日實際ニ據テ論スルニ、立法官ハ、衆ヲ以テ合

ヒ、時ヲ以テ聚散又、今試ニ三十年前遡布スル所ノ法ヲ以テ、三十年後在位ノ議員ニ問フト云ヒ、其人已ニ異ナリ、豈ニ能ク其義ヲ知テ其疑ヲ決セン乎哉、千八百三十七年ノ新令、明法ノ權ヲ以テ盡ク大審院ニ屬シ、議院ノ問議ヲ假ラズ、大審院亦疑議決セズ、ノ法ノ備ラサル丁明白ナルニ至テハ、改作ノ權、始テ議院ニ屬ス、曰廢止、「アブロガシオン」曰脩正、「モディフィカシオン」議院ハ、法ヲ擧止論定シ、大審院ハ、法ヲ申明ス、是國制ノ最便ナル者、任スル所果メ

民法第百八十條
第二項ニ云ヘリ人ヲ錯誤シテ婚姻シタル時ハ夫婦中其錯誤ヲ受ケ婚姻シタル者ニ非レハ婚姻取消ヲ訴フヘカラズ

其人ヲ得セレメハ、信ニ國民ノ慶幸ヲ保ツニ足ラン歟、

佛蘭西一法士為余輩説ク曰、那破倫氏「コート」ヲ定メシ以来、今日ニ至テ未タ増補ノ挙アラズ、其欠畧メ備載セサル者、将ニ百ヲ以テ數ヘントス、私生子ヲ以テ養子トスル者アリ、之ヲ許スベキ乎否ノ如キ、法ニ正條ナシ、婚姻錯リテ別人ト婚スルノ條、其錯リトハ、其約ヲ錯ル歟、或ハ其人ヲ錯ル歟、又法ニ明文ナシ、其它此ノ類猶多シ、法ヲ執ル者、各々見ル所ヲ異ニセザルヿ能ハズ、大審院ノ申明ヲ待ツ所以ナリ、

五十九

職員

大審院、分テ三局トス、曰上告局、曰民事局、曰刑事局、毎局訟廷ヲ開クニ、評事官（即裁判官）十一人ヨリ少キヲ得ス、局長其中ニ在リ毎局局長、称ノ長官トス、院長一人、随意各局ニ臨ミ、事ニ当ル、称ノ首長官トス、評事官四十五人、各長官ヲ合セテ四十九人トス、若シ廷ヲ開クニ当テ、評事官不在及事故ヲ以テ、十一人ヨリ少キニ至レハ、其日廷ヲ開カサル局ノ評事官ノ年資尤久キ者ヲ取リ数ニ充ツ、若シ判決ニ当リ、評事官丙議（パルタイジュ）平

分ノ決スベカラサレハ、更ニ五人ヲ加ヘ、再按ス、本局ノ評事官、数ニ足ラサレバ、又它局ノ年資尤久キ者ヲ取ル、若シ三局合負総議ノ事件（第三次破毀）ニ至テハ、評事官三十四人（院長局長共其中ニ在リヨリ少キヿヲ得ズ、

大目代一人、大審院目代事務ヲ総括シ、大代言官ノ事務ヲ課付ス、大目代欠ル時ハ、大代言官、年資尤久キ者、其事ヲ代理ス、大代言官、六人（即目代輔負）各局目代事務ヲ行フ、書記首官一人以上、並ニ国主撰任ス、書記（フムミ、ヒレヒエ）手四人、書記首官ノ具状ニ依リ、院長之ヲ任免ス、使部八人、院長任免ス、

大審院代言人六十人、代言代書ヲ兼又它ノ代言人ト同カラス（議ニ代言人部ニ見ユ）

右「カラン」氏ニ据ル

「パンリー」「ヨルヌ」氏ノ論曰、大審院ハ、国憲ノ標準、時アリテ建国法「コンスチチスシオン」ノ大事ニ至テモ、亦其監正ヲ受ケンヿヲ、此レ其重任タル何如ゾヤ、其務ニ当ル者、精学研思、練達老事、行儀厳正、公平無黨ナル者ニ非レハ、孰カ敢テ之ヲ許サン哉、嘗テ巴里戒厳シ、軍法ヲ以テ治ム

ルノ時ニ当リ、法司ノ勢、軍威ノ下ニ屈シ易シ、然ルニ大審院、法ヲ執テ失ハサリシ、亦其職ヲ辱メズト云ベシ」、抑々其撰任ノ際ニ至テ、未タ其果メ政府ニ偏倚セズ、屹然獨立スルヿヲ保ツヿ能ハサルナリ」政府新興ノ際、或ハ其忠勲ヲ厚クメ、其人ヲ大審院ニ採用シ、其方ニ衰ル時ハ、豫メ保証寛假ノ他ヲ為サンヿヲ欲シ、黨類ヲ引テ、其中ニ植ヱ、支レ大審院ノ設ケ、豈ニ政府ノ器械ナラン乎、大審院ノ官位、豈ニ執政ノ門客、国事ニ奔走シ、黨論ニ摩爛ノ、久ク學術ヲ廢棄スル者ノ地ナラン乎、

事務

大審院ノ事務、分テ八日トス、

一ニ曰破毀

凡民事ニ在テ、上等裁判所ノ裁判、及郡裁判、商事裁判、治安裁判、工事裁判、及判断人ノ終審、並ニ大審院ニ上告シ、破毀シタルトキ得、凡ソ刑事ニ在テ、會審院、及訴罪局懲治局ノ裁決、及懲治裁判、警察裁判ノ終審、治罪掛裁判官ノ令状、及海陸二軍裁判ノ裁決、並ニ大審院ニ上告シ、破毀シタルトキ得、

元大審院ニ上告シ、破毀ヲ乞フベキノ箇條ハ、第一聽理ノ規程ヲ破リ、或ハ欠キタル者、第二論決、法律ニ牽キタル者、第三管外ノ事ヲ侵越シタル者、第四權外ノ事ヲ侵越シタル者、第五事狀ノ錯失、公証書ヲ以テ証白スル者是ナリ、治安裁判ノ終決ハ、越權ニ屬スル者ヲ除ク外、上告スルヲ得ス、海陸軍裁判ノ裁決ハ越管越權ヲ除ク外、上告スルヲ得ス、

大審院ニ訴ヘテ破毀ヲ求ルヲ得ルノ人ハ、第一ニ原被両造、第二ニ大審院ノ大目代、第三ニ司法執政是ナリ」元大審院ノ破毀ハ、通常原被両造ノ上告ニ由ル、但原被両造其定期民事三月刑事三日内ニ上告セズメ、失法違律、終ニ辨白セザル者アルヲ恐レテ、為ニ大目代官ヲメ上告ノ任ニ居ラシメ、若シ法ヲ破ルノ裁判アリテ、原被人期ヲ過キ上告セサル時ハ、大目代之ヲ大審院ニ訴ヘ、破毀ヲ求ム、是レ各民ノ權利ヲ護スル為ニスルニアラスメ、法律ヲ護スル所以ナリ、故ニ原被人ハ、已ニ期内上告セサルヲ以テ、已決ノ裁判ヲ甘服ストシ、大目代ノ上告ニ因

テ裁判破毀トテ云ヒ、因テ以テ其已決處分ヲ逃ルヽヿヲ得ス、凡リ裁限ノ裁判ハ、初審終審ヲ論セズ、又上告定期内外ヲ論セズ、民刑共ニ司法執政ヨリ大目代ニ下シ、大目代之ヲ訴ヘ破毀ヲ求ム、但シ民事原被人刑事ハ此例ニアラズ因テ以テ其已決處分ヲ逃ルヽヿ能ハズ、

二日裁判管理相觸ルヽ者ヲ判決ス

凡二裁判所三所以上同例共ニ一事ノ訟ヲ受ケ、互ニ之ヲ審理ノ相帰一セズ、及二裁判所、互ニ其訟ヲ辞メ審理セサル者、之ヲ管理相觸ルヽ者ト

ス、裁判所ト行政諸官ト、管理相觸ルヽ者ハ、国議院、之ヲ判決シ、裁判所、互ニ相觸ルヽ者ハ、大審院、之ヲ判決ス、繁ヲ文リ異ヲ絶ツ所以ナリ、

以上ロブロン氏治罪法注ニ据ル

安裁判ト相觸シ、其属スル所ノ郡裁判、及上等裁判、同カラスメ、決ヲ大審院ニ仰ク者、其属スル所ノ郡裁判日ケレバ、郡裁判之ヲ判決シ、郡裁判同カラズト云ヒ、郡裁判ノ属スル所ノ上等裁判日ケレバ、上等裁判之ヲ判決シ、一ノ郡裁大審院ノ決ヲ仰カス、

判、它ノ郡裁判ト相觸シ、其属スル所ノ上等裁判同カラスメ、決ヲ仰ク者其属スル所ノ上等裁判日キ者ハ、上等

裁判之ヲ判決シ、大審院ノ次ヲ仰ハス一ノ上等裁判、它ノ上等裁判ト相觸ルヽ者、並ニ原被人ノ願ニ因リ、之ヲ判決シ、刑事ニ在テ、上等裁判會審院、及郡裁判、警察裁判、治罪裁判官ヲ論セス、兩管共ニ一罪ヲ理シ、若クハ其罪相連ナル者ヲ理シ、其所屬互ニ同ハラサル者、郡裁判以下、其屬スル所ノ上等裁判所ニ訴ヘ、上等裁判所ノ決ヲ判決シ、又海陸軍裁判ト通常大審院ノ決ヲ仰ハス諸裁判ト、共ニ一罪若クハ其罪相連ナル者ヲ理シ、互ニ相觸ルヽ者ハ、並ニ原被人、或ハ目代ノ願ニ因リ、大審院之ヲ判決メ、其一方ニ定メ、

大目代、司法執政ニ具申シ、執政ヨリ其裁判所ニ令メ歸一處分セシム、

三日、裁判管理ヲ移易スルノ求ヲ判決ス、

凡詞訟、原被ノ一方、裁判官ト親姻タリ、犯人裁判官ト嫌隙アルカ加キ、其間利害相干カル當然ノ事情アリテ、訟人、犯人、其管理ヲ它ノ裁判所ニ移易スルヿヲ乞フ者、之ヲ依法嫌情トス、犯人、其他方人心ニ關係メ、或ハ騷亂ヲ生スルノ恐レアル時ハ、目代ヨリ司法執政ニ具狀シ、執政ヨリ大審院ニ移メ、它ノ裁判所ニ移易ス

ルヿヲ求ル者、之ヲ安寧ノ為ノ移易トス、以上ロシヤ民訴訟法及治罪法注ニ據ル民事ニ在テ、上等裁判ニ係ル嫌情、郡裁判ハ、上等裁判ノ嫌情ヲ判ス、刑事ニ在テ嫌情及安全ノ為メ移易ノ求メハ、大審院之ヲ按審メ、其当然ナルヿヲ判スレハ、大目、代ヨリ司法執政ニ具申シ、執政ヨリ其裁判所ニ申令處分ス、

四日、裁判官ニ對シ私訟スル者ヲ判決ス、

凡矛一ニ、審理及裁決ノ間、裁判官、詐譎欺妄及貪驥ノ事アルヿヲ察シ、才二ニ、明ニ法ニ違フノ事ナリ、才三ニ其過失法ニ於テ抵償ノ責ニ當リ、才四ニ告ヲ承ケ拒テ受理セザル者ハ、原被共ニ之ヲ訴告スルヿヲ得、但刑事ハ本案ニ連及スル者及私償ヲ求ムル者ニ限ル郡裁判以下ノ裁判所ニ裁判官全員ヲ以テ對シタル私訟、及上等裁判所ノ裁判官負ニ對シタル私訟ハ、上等裁判所、判決シ、上等裁判所及會審院ニ對シ、若クハ其一号ニ對シタル私訟ハ、大審院、之ヲ判決ス、

五日、裁判官ノ過失ヲ監察ス

大審院ハ、全国法吏ノ規律ヲ監察シ、上等裁判

會審院官吏、失行アル者ハ、状ヲ下シ喚名シ、三
乃至會シテ責戒シ、又假ニ其職ヲ停ムルヿヲ
得、千八百十年ノ法ニ從ヘハ、司法執政其廷ニ
首班ス、但千八百三十年夏草已未、屢々責戒ノ
事アリトヰヘトモ、執政現ニ臨班スルヿ無シ、責
戒ノ時ハ、其責ヲ受ル本人、相談人ヲ引テ自ラ
護スルヿヲ得、相談人即代言人
六日裁判官ノ軽重罪ヲ推治ス
凡裁判官、郡裁判商事裁判ノ全員、又上等裁判
ノ一員以上、其職務ニ付キ犯シタル軽重罪、其它

ハ上等裁判所推理ス
上等裁判ノ一員以上、其職務外
ニ付キ犯シタル軽重罪其它ハ上等裁判推理スハ、大審院
之ヲ推治シ、其罪狀ヲ得レハ通常刑事裁判ニ
下付シ、論判セシム、詳ニ治罪法第四卷第三章ニ見エ
七日翻審（ほんしん）ノ法
重罪及懲治罪ハ、翻審ノ法ヲ設ケ、已ニ行刑シ
タル者ヲ申雪スヤ破毀ハ、裁判宣告ヲ未タ行刑ヤサル者、翻審ハ、已行未行ヲ
論セス、第一ニ、人命犯ヲ以テ決放スルノ後、其殺
ヲ受ケタルノ人、其実死セサルノ證ヲ得ル者、
第二、甲、刑ヲ被ルノ後、乙、又本事ヲ以テ論決セ

ラレ、二犯相抵ル者第三、本按已ニ決メ後、本按ノ證人偽證ト云ヲ以テ論決サレタル者ハ、翻審ヲ求ムルヿヲ得、凡翻審ヲ求ムルヿヲ得ル者ハ、司法執政、及被刑人、及其死後ニ在テハ、其妻子、親族、後継人、及名代人、皆大審院目代ニ經由シ、大審院之ヲ検證メ、它ノ裁判所ニ付シ、判理セシム、

ハンリー、コルフ氏、曰、凡裁判ノ制、犯人ニ保護ノ方法ヲ授クルヿ、至ラサルヿナシト云ヒ、猶時トメハ無辜出入ナキヲ保ツヿ能ハズ、翻審ノ法ハ、更ニ力所及已決裁判ノ失錯ヲ改正補塞スル所以ナリ、此法千八百六十七年六月、旧治罪法ヲ脩正メ、益々完備ヲ致セリ、

即チ今ノ治罪法第三卷第三章

八日法律改正ノ事ニ干預ス

大審院、毎年一度、總代人ヲ出シ、國主ニ謁メ、法律ノ欠失、事実ニ験知スル者ヲ條陳スルヿヲ得、

合テ之ヲ論スルニ、大審院ハ、法紀ヲ審固シ、條章ヲ申明シ、全國訟獄ノ統一ヲ持シ、失法違律、越権、

越管ヲ制シ、諸裁判官ヲ監督シ、其罪ヲ糾治スル
ニ任ス、

右大審院大代言官「ボランシ」氏ニ据ル

三局事務順序

三局一曰上告局、二曰民事局、三曰刑事局、上告局
ト民事局ハ、同ク民事ヲ判スルノ所ニシテ、其事務
順序アル而已、凡民事ノ終審ヲ上告シ、及裁判官
ヲ私訟スル者ハ、上告状ヲ大審院ノ書記局ニ
投スル、其佛蘭西本國内ニ住スル者ハ、其終
審裁判ヲ受ケタル日ヨリ三月内ニ於テス、本國外ニ
住スル者ハ遠近ニ随テ異同アリ上告状ハ、大審院代言人之ニ調
印シ、上告状ト共ニ、其已ニ決裁判ノ憑本及百五十
布蘭ノ豫納金ヲ納ル、書記局、上告状ヲ受ケ、簿冊

ニ登記シ、其日ヨリ、急事ハ一月、常事ハ二月内ニ、代言人、記念書ヲ作リ、上告事件ノ理趣ヲ辨明スルニ備フ、上告局ニテハ、局長、毎月上告事件ヲ本局評事官ニ分課シ、掛リヲ命シ、其掛ノ評事、急事ハ其月内、常事ハ二月内ニ、其書類ヲ検閲ノ、始末（テッポノル）書（エキリ）ヲ作リ、書類（ピエス）ト共ニ、書記局ニ還付ス、書記局、即日之ヲ大目、代ニ遞送シ、大目代、便速大代言官ニ掛リヲ命シ、意見（ミノリエオニ）ヲ構按セシム、續ヒテ評事十一人以上、公廷（コーデエンス）ヲ開キ、始ニ掛リ評事官ノ始末書ノ宣讀ヲ聽キ、次ニ代言人ノ辨說ヲ聽キ、（辨說ノ有無ハ代言人ノ意ニ

仕ス終リニ大代言官ノ意見ヲ聽キ、然ル後ニ、或ハ其許ヲ許シ、民事局ニ移シ、或ハ直チニ之ヲ仆ク、之ヲ仆クルニハ、其理由（モノ）ヲ述ヘ、豫納金ヲ没入、何等ノ名義アリト云ヒ、更ニ許狀ヲ進ムルヲ得ス、是上告局ノ事務ナリ、

コルヲ氏論曰、上告局、民事局、共ニ一事ヲ受理シ、上告局、或ハ直チニ之ヲ仆ケ、或ハ其曲折明メ難キ者ハ、之ヲ民事局ニ遞送ス、其事務生熟アルニ過キスメ、上告局亦往々情勢輾轉メ精嚴、民事局ト異ナルヿナシ、上告ス

ル者、一ヲ以テ二ニ觸ル、甚タ重カラス乎、

上告人、上告局ノ許シヲ受クル時ハ、始テ上告對理ノ順序ヲ行フ、三月内ニ於テ、被告人ニ民事局ニ出頭スベキノ喚告ヲ為ス、若シ三月ヲ過テ知告セザレハ、許可ヲ効ヲ失フ、但外國ニ住スル者ハ其期遠近ニ從フ　被告人、喚告ヲ受ルノ後、巴里近傍十里内ニ在ル者ハ、十五日内ヲ期シ、其它國内遠近ニ住スル後ヒ、或ハ一月、或ハ二月、或ハ三月ヲ期シ、外國ニ住スル者ハ同前　又大審院代言人ニ依リ、其答狀ヲ原告人ノ代言人ニ送リ、又書記局ニ付ス、出頭トハ、代言人ニ答狀ヲ托スルヲ云、被告人自ラ出ルニアラス　原告人ハ、又再ヒ門許狀ヲ送リ、及書記局ニ出スヿヲ得、其後民事局、公廷ヲ開キ、聽斷スルヿ、上告局ノ順序ニ同シ、若シ其原告不當ナル時ハ、之ヲ斥ケ、三百布蘭ノ罰金ヲ科シ、豫納金其中ニ在リ更ニ被告人ニ、百五十布蘭ヲ償當セシム、若其原告當ナル時ハ、豫納金ヲ還付シ、其已決ノ裁判ヲ破毀スルノ命ヲ下シ、其事未曾テ裁判ヲ經ザル者ト同クシ、更ニ其初ニ裁判シタル裁判所ト同等ノ它ノ裁判所ニ下メ聽斷セシム、巴里ノ上等裁判所ノ裁判ヲ上告シタル者ハ、黜罪ノ上等裁判所ニ下スカ如シ是民事局ノ事務ナリ、

民法第七十五條ノ第三項ニ民生ノ官吏トスモノ即此条ノ官籍官ナルヘシ

民刑ヲ論セズ、大審院ノ判理スル所ハ、只其上告ヲ受ケタル裁判ノ果メ法ニ中ラス、規則ニ叶ハサル乎否ヲ檢察シ、聽理及裁決、共ニ法ニ合フ者ハ、其上告ヲ作ケ、否ナレハ上告ヲ受ク、其訟ノ情實供情ニ至テハ、一ニ上等裁判或郡裁判ノ審理シタル所ニ据リ、實ヲ取リ、更ニ推問ヲ費スヿ無シ、例如ヘハ、婚約ノ訟アリ、上等裁判所ノ宣告ニ据レハ、其許可シタル民籍官ハ、其約ヲ願フ所ノ者ノ一方ノ住スル地ヲ管轄スル者ニ限ル因テ上等裁判所、其約法ニ

原告ノ意
甲地ヲ管轄スル民籍官ハ、乙地人民ノ婚姻ヲ許可スルノ權ナシ
故ニ婚姻ノ数ナシトス

原告ノ意
私生ノ子ハ養子トナルヘカラズ
故ニ財産ノ相續ヲ得ス

合ヘルヿヲ裁断セリ、人アリ其民籍官ハ、實ニ其地ヲ管轄スル者ニ非ルヲ以テ、大審院ニ上告スルトモ、大審院之ヲ受取ルヿ無シ、若シ上等裁判ノ宣告スル所、初ヨリ民籍官、其地ヲ管轄スル者ニ非メ、然ルニ其約束法ニ合ヘルヿヲ裁断シタル時ニハ、大審院其失謬ヲ糺メ其裁判ヲ破毀スルヿヲ得「ログロン」氏訴訟法注 又一人身死メ、私生子ノ養子ト名ケタル者アリ、養子ハ、普通養子ノ名ヲ以テ遺産相續ヲ得ントス、其弟姪タル者、私生子養子タルベカラズ、因テ相續ヲ得ヘカラサルヿヲ許フ、上

私生ノ子ハ民法第三百三十一条ニ第三百四十二条ニ至ルマテニ詳ナリ

養子トナルヲ得ヘキ者ハ民法第三百四十三条ニ第三百四十六条ニ如クナルヘキ者

等裁判所、其事ヲ按メ、其養子ハ確ニ其父ノ私生子ニメ、胡乱ニアラサル者ヲ審明シテ、又私生子、養子タルヘク、其相續ヲ得ベキ者ヲ裁断シタリ」

於是、弟姪タル者、更ニ大審院ニ上告ス、大審院、之ヲ検閲メ、其養子ノ私生子タル者ハ、一ニ上等裁判所ノ裁判ヲ照依シテ、更ニ審治ヲ貴トシ、更ニ審治ヲ貴サス、唯々佛蘭西ノ法ニ在テ、私生子、養子トナリ及相續ヲ得ヘキ乎否ヲ論窮メ裁ヲナス、是ナリ」

凡ソ大審院ニ上告スルニ、刑事ハ、其上告スヘキ旨ヲ、其裁判所ニ告ル時ハ、即時其裁判施行ヲ止メ、大審院ノ決ヲ待チ、上告受ケラレサルニ至テ、始テ施行處分ス、故ニ上告ヲ許スノ期短シ、民事ハ、上告スト云ヒ、其間裁判施行ヲ止ムルヿナシ、其上告受ケラレ破毀ノ宣告アルニ及テ、始メテ施行ヲ止ム、故ニ上告ヲ許スノ期長シ、

按スルニ、大審院上告ノ法、略治罪法ニ見ヘテ、訴訟法、一ノ正條明文ナシ、是レ議者其欠畧未備ヲ論スル者ナリ、今粗其順序ヲ録メ、其槩畧ヲ見ルノミ、

刑事ニ在テハ、刑事局、專ラ上告ヲ受理シ、民事ノ

上告、民事二局ヲ遞由スル者ト同カラズ、凡重罪懲治罪ノ終審ニ服セズメ上告セントスル者ハ、中間三日内（裁判宣告ノ日ト上告ノ旨ヲ告ルノ間中空三日ヲ得ルヲ云）ニ、其意ヲ其宣告ヲ受ケタルノ裁判所ノ（重罪ハ會審院懲治罪ハ上等裁判所）書記局ニ申告シ、其施行ヲ止メシム、若シ目代及私訟原告人、罪犯ヲ寛縱シタル裁判ニ服セスメ上告スル者ハ、重罪ハ二十四時内、輕罪ハ三日内ニ、申告シ、及ヒ被告人ニ宣示セシム、申告シタル後十日内ニ、上告人其上告狀ヲ又其裁判所ノ書記局ニ付ス、（目代ノ上告スル者ハ此ノ例ノ外タリ）其目代官、受ケテ之ヲ司法執政ニ送呈シ、執政、二十四時内ニ、之ヲ大審院ニ遞送ス、大審院刑事局長官、之ヲ評事官ノ中一人ニ課付シテ掛リトシ、又大審院目代官ニ通シ、意見ヲ搆按セシム、尋ヒテ公廷ヲ開キ、判決シ、其訴當ナレハ、裁判ヲ破毀メ、更ニ它ノ同等ノ裁判所ニ送下メ、再按セシム、否ナレハ、其豫納金百五十布蘭ヲ没入メ之ヲ斥ク、特例ヲ以テ豫納金ヲ免スル者アリ、重罪人及官吏、官ノ為ニ訴フル者、及貧民ノ證アル者、是ナリ、（詳ニ治罪法ニ見エ）海陸軍裁判ノ越権ヲ訴フル者ハ、上告

期限ノ法ナシ、是ヲ刑事局ノ事務トス、其它裁判官犯罪ニ至テハ、上告局民事局トシテヲ遍理ス、刑事局ニ付セス、其處務犬牙相錯ハル、今之ヲ畧ス、大審院、已決裁判ハ、法ニ中ラサルヿヲ判シ、之ヲ破毀メ、它ノ裁判所ニ付メ再按セシム、它ノ裁判所、大審院ト所見ヲ同クセズ、前ノ裁判ヲ踐テ裁判シ、從テ裁判シ、從テ上告シ、又從テ破毀スル、再ニ至リ三ニ至ルヿ、往々コレアリ、此レ其限止スル所ヲ定メサレバ、大審院ト上等裁判所トノ間、爭議止ムヿ無ク、更ニ決ヲ政府或ハ議院ニ取ラシムルニ至テハ、大審院、有レ氏無キカ如ク、何ヲ以テ其全國一法ノ大任ヲ對揚セン乎、治罪法第四百四十條ニ云、若シ第一破毀ノ後、第二ノ裁判又上告セラル時ハ、千八百〇七年九月十六日ノ法ニ條載シタル規則ニ從ヒ、處分スベシ、今其法亦已ニ廢メ、更ニ千八百三十七年四月一日ノ法ニ因ル、其第一條ニ云、若シ第一ノ裁判ノ破毀ノ後ニ、第二ノ裁判亦前ノ裁判ニ同クメ、其同人同事ニ因テ再上告スル時ハ、大審院、法官全員、合議ノ判論スヘシ、第二條云、第二ノ裁判亦破毀ヲ受

ケ、第三ノ送付ヲ得タル上等裁判或ハ郡裁判所ハ、其法律ヲ論擬スルニ付テ、大審院ノ決定ニ依準スベシ、ロクロン氏

右グランシ氏及ログロン氏ニ据ル

千八百三十四年四月十日集會（あゞそしあしをん）ニ付テノ法

第一條　凡ソ二十人以上ノ集會ニ付テハ假令小數ニ之ヲ分切シテ會合シ且ツ毎日或ハ期日ニ會合セサルモ刑法二百九十一條ヲ以テ之ニ當ルヲ得可シ○政府ノ與ヘタル許可ハ常ニ之ヲ取戾スヲ得可シ

第二條　許可ヲ得サル集會ニ入リシ者ハ二月ヨリ一年ノ禁錮及ヒ五十「フラン」ヨリ千「フラ

ンノ罰金ニ刑セラル可シ○再犯ノ場合ニハ此刑ヲ倍スルヲ得可シ○再犯ノ場合ニハ刑ノ高極ノ二倍ヲ過キサル時間別段ノ監督ヲ受刑者ニ受ケシムルヲ得可シ○何レノ場合ニ於テモ刑法第四百六十三條ヲ当ツルヲ得可シ

第三條　許可ヲ得サル集會ノ一度或ハ數度ノ會合ニ家或ハ室ヲ故ラニ貸シタル者ハ其從トシテ之ヲ刑ス

千八百四十八年七月二十八日密社（おとんー て。さくもっと）ニ付テノ布告

第十三條　密社ヲ禁ス」凡ソ密社ノ社員トナリシ者ハ百ヨリ五百「フラン」ノ罰金六月ヨリ二年ノ禁錮及ヒ一年ヨリ五年ノ公權剝奪（プリワシ）ヲンデ、ドロワ、レビック）ニ刑セラル可シ○密社ノ長或ハ發起人ニ對シテハ此諸罰ヲ倍スルヲ得ヘシ

○都テ此刑ヲ言渡スモ他諸法ニ記載スル所ノ重罪或ハ輕罪ニ付テ言渡スヲ得ヘキ刑ト

抵觸スルヿナカルヘシ

「タローズ、レペルトワル」二十九号 四百五十葉

第六章行政事件ノ裁判

第九百二條行政官ノ職タル一ハ人民ノ乞願ニ裁定ヲ與ユ之レヲ「シユスチス、グラシユズ」ト云フ一ハ人民ノ行政官ニ對スル訴訟ニ判決ヲ與ユ之レヲ「シユスチス、コレクチシユズ」ト云フ而メ其ノ行政裁判廳ト称スルモノハ邑長、副州長州長、卿、參事院、參議院、會計、檢査廳ナリ而メ此ノ裁判廳ノ組立及ヒ其ノ訴訟手續キニ至テハ行政官組立及ヒ行政訴訟手續キヲ參看アレ

第九百三條、此ノ裁判廳ノ「ジユスチス、クラレユス」及ト「シユスチス、コレクシユーズ」ニ於ケル管轄區域ト其ノ規則トハ載セタ左ノ番号ニ在リ即チ行政管轄ノ部ニ第三百九條ヨリ第五百三十七條ニ在リ參議院ノ部ニ第四十七條以下ニ而シテ會計廳ノ部ニ第二百一條以下ニ在リ然レ𪜈爰ニ一言セサルヲ得サルモノナリ即チ參議院ノ設置ト其ノ組立トノ原則ノ千八百五十一年十二月二日王黨革命後變更セラレタルナリ云々（以下畧ス）

第九百四條行政管轄ノ部第三百五十條以下及ヒ參議院第七十條以下ニ行政訴訟事件ト純粋行政事件トヲ區別シタリシ今又タ茲ニ此ノ二ノモノヲ明別スヘキモノアリ諸フ之レヲ目次セレ

第一國林ヲ賣拂ヒ入札ヲ受ケタルモノ償金ノ頭書ヲ出シ大藏卿ノ之レニ應答シタル書簡ハ參議院ニ上告トナラサルナリ、此ノ場合ニ於テハ特ニ國財訴訟ヲ裁決スルノ任タル參事院ニ上告スルヲ得

第二既ニ法律上ニ於テ満期得免トナルヘキニ臨ミ年金ヲ附與スヘシト命シタル省ノ判決ハ確定裁判（既ニ控訴上告ノ期限已ニ過キテ確定シタル判決）ニ非サルナリ只年金ヲ取ルノ權利ヲ許可シタルノミナリ故ニ若シ法律上誤解アラハ此ノ省ノ判決ハ效ナシトス（御ニ係ル事ナキヲ以テ畧ス）

第三　登記察（アンレギストルマン）ニ於テハ佛国ニ登記察アリ大藏省ニ属ス該察ニ於テ兼テ官有地（ドメーヌ）及ヒ印紙（タバコ）ノ事ヲ司トル○本察ハ巴理府ニアリ察頭一人年給二万フランクヲ受ク局長四人各〻年給二万二千フランクヲ受ク○地方派出ノ官員ハ各州ニ登記長一人監督数人検査数人アリ云〻

登記長監督、検査、等其他地方ヘ派出ノ官吏

第四　間税察（コントリビュシヨンアンシレクト）ニ於テハ（間税察ハ巴理ニアリ大藏省ニ属ス察頭一人年給三万フラ

ンクヲ受ケ局長二人各〻一万二千プランリヲ受ケ云々○地方派出ノ官員ハ之レヲ各州各郡各邑ニ區別シ其数多シ)

コントロルウル及ビルスヘウル(皆派出吏ノ名)等其他地方派出ノ官吏

第五　国境税関(バミュース)ニ於テハ

在勤ノ税関吏

第六　駅逓(ポスト)察ニ於テハ

諸局長コントロルウール及ヒアンスペクトール(皆地方在職吏ノ名)

第七　陸軍事務局ニ於テハ

陸軍裁判所ノ吟味掛リ大尉

コンマンダンダルム(鎮臺及ヒ営所ニ在職士官ノ名)

工部監守○門監

第八　海軍事務局ニ於テハ

船長○海軍裁判所吟味掛リ士官○海軍警察使

港上ノ士官○商船ノ船長○カピテーヌ

ブルユドム○軍港及商港ノ備警兵○漁

獄裁判所ノ判事等

第九

造幣察付ノ警察使

第十

度量撿査官

第十一

アジヤンウワエー（　　）

第十二

幼児工作場ノ撿査掛リ

第十三

河岸監守中及ヒ港上監守○塩割地ノ巡邏ノ監守

第十四

巴理内肉菜市場ノ監守

第十五

彈藥銃鎗造制師ノ撿査官

第十六

大中小学校ノ監督官

第十七

使吏

第十八　評價人

第十九　衛生局ノ官吏

第二十　外国在留ノ佛国領事

第二十一　備警兵ノ下等士官及ヒ兵卒

第二百六十四　警察士（原語アジヤンドボリス又巡査ニ当リ選卒ト訳ス原今我国長之レヲ指揮ス）ハ初メ千七百九十一年七月十九日布告ノ法ニヨリテ註誤罪ノ事件ヲ探索シ始末ヲ認メテ之レヲ証告スルノ任ヲ受ク○然レモ治罪法ノ正条中ニ之レヲ記載セス故ヲ以テ警察吏ノ此任アルヿハ当時廃セシモノト思ハル○警察士ハ地方官廳ヨリ設置スルモノナレハ註誤ノ事件ヲ探索スルハ其任ナレモ司法警察官吏ノ名目ナキ故ニ始末状ヲ作リ裁判所ニ向フテ証告スルノ

権ナク警察士ノ報告ハ相当ノ手続ヲ過キル
ニ非レハ訴訟中ニ何ノカモ有セス

第二百六十五　何人ニ限ラス（官吏ニ非ラサル者ヲ云）国家ノ
安寧ヲ害スル罪犯或ハ人命所有物ヲ害スル
罪犯ヲ目擊シタル者ハ之レヲ検事ニ報告ス
可シ（治罪法三十条）然レモ此等ノ報告ハ通常ノ忠告
ト異ナラス裁判上ニ於テハ決シテ確証トナ
ス能ハス

第二百六十六　公ケノ兵力ノ名アル官吏ハ此（フランスヒユデリツツ）
名義ヲ以テハ司法警察ノ所分ヲ行フ能ハス
唯此警察ノ任アル官吏ノ求メニ應シテ協力
スルノミ○所謂公力官吏トハ
一護衛兵、常備兵、備警兵
一森林監守田野監守
一警察士及関税ノ下官ナリ
其他治罪法百六条ニ拠レハ通常ノ人民ト雖
モ現行犯ノ場合ニテハ其犯人ヲ捕縛スルノ
権アリ

千八百三十七年四月一日布告

再度上告ノ末大審院ニテ申渡ス判決ノ
權力ニ係ル法

第一條　凡ソ終審ノ判決ヲ一回破毀シタル後
更ニ同事件ニ付同原被ノ為メ第二ノ上等裁
判所ニテ判決シ然ルニ又更ニ之ヲ上告スル
ヿ最初ノ如クナル時ハ大審院ハ三局合議シ
テ判決ス可シ

第二條　斯クノ如ク第二回ノ上等裁判所ノ判
決ヲ大審院ニテ破毀スルヿ又最初ノ如クナ

司法省

レハ其訴訟ヲ廻付セラルヽ第三ノ上等裁判所ニ於テハ必ス大審院ノ決議ニ從フ可シ

第三條　第三ノ上等裁判所ハ通常ノ訟庭ヲ用ユ但シ又事件ノ種類ニ依リ尊大ノ式ヲ用ユルモ有ル可シ

民事裁判申渡状書式（ロクロレ氏訴訟法附録）

佛國帝王第三世那勃列翁

現今及ビ將来ノ人ニ告ク

今般何郡ノ民事裁判処ニ於テ裁判申渡ス其文左ノ如シ

此訴訟

原告何某○○○　此處住処職業等ヲ記

被告何某○○○　此處同上

ノ間ニ起コリ

原告申立ツル処

此段落ヲ事実ノ部トスウ

一、、、、、

一、、、、、　此処申立ノケ条ヲ記ス

被告答辯スル処

一、、、、、

一、、、、、　此処申立ノケ条ヲ記ス

該裁判所ニ於テ原告何某ノ代言何某被告何某ノ代言何某ト突合セ吟味ノ上検事ノ所論ヲ聞キ然ル後法律ニ循ヒ判事評論シテ判決スルニ

一　此處ヲ名付テ判決理由ノ部

此段落ヲ理由ノ部トスウ

一　トスウ

即チ何某ノ申立テハ何等ノ理由ニテ取上ルト雖又ハ取上ザルトカ凡ベテ判事ノ見込ヲ記シ原被ノ曲直ヲ明記ス

一

此段落ヲ申渡シノ部トスウ

是レニ依ッテ申渡何某ハ何某ニ對シテ○

○○○　此處物品返却トカ借金返済トカ其他申渡ノケ条ヲ記ス　ス可シ又此訴訟ノ入費ヲ拂ウ可シ

處長何某判事何某何某列席シ公聽ノ訟庭ニ於テ之レヲ宣告スル實ニ千八百何十何年何月何日ナリ

處長何某　性名自署

惣テ使吏此申渡状ノ執行ヲ求ムル者アレバ汝ヂ之レニ應ズ可シ○惣テ諸裁判所ノ検事長、検事及ビ公カノ士官ハ使吏ノ求メニ依リ脇カシテ之レヲ報行セシム可シ

此状申渡シノ厲シニシテ即チ處長ノ命ヲ奉シ今吾書記官之レヲ渡スモノ也

書記何某　性名自署

書記官　性名自署

上等院ヘ控訴スル格別ナリ

手續ヲ命スルモノニシテ手續ノ上ニ事ノ当否ヲ決スルモノニ非ス

ムールロン氏訴訟法（パリヂユ百〇ニ）

○裁判申渡（ジレユーヂユマン）ヲ區別シテ

一確審（デフ井ニチーフ）申渡

一豫審（アバン、フヱルト、ロウ）申渡

ト為ス

確審申渡トハ訴訟ヲ受理スル裁判処ニ取ツテハ之レヲ以テ其局末ヲ結ブモノナリ

豫審申渡トハ其裁判処ニ於テ未タ訴訟ノ曲直ヲ決セザル前ニ豫ジメ要用ナル手續キヲ命スルモノナリ

三種ノ訳字ハ原語ノ本意ニ適セズト虽ドモ皆註釈ノ文中ヨリ見出シタル字ニシテ却テ事実ノ真意ニ当ルト思ウ

○豫審申渡又分ツテ三種トス

一プロビゾワール（難事保護）

一プレパラトワール（吟味進歩）

一アンテルロキュトワール（曲直前知）

プロビゾワール（難事保護ノ豫審）トハ訴訟事件吟味ノ際中ニ或ハ差當リ他人ノ為メ苦害ヲ受クル者アルカ或ハ一物其儘ニ差置ケハ却ツテ其物ノ損失ヲ生スル場合ニ於テ裁判処ヨリ此等ノ事ヲ保護スル為メニ申渡スモノナリ○譬ヘハ分居ヲ訴ウル婦ハ訴訟ノ間夫

保護ノ訳字ヲ此文ニテ見出ス亦語ニシヘルバトワー

ヨリ養育料ヲ受ケタシト其訴訟ノ始メヨリ之レヲ願ウノ権アリ判事此願ヲ聞届ケテ夫ニ養育料ヲ申渡ス是レ保護ノ豫審ナリ○又被告ノ手ニ在ル不動産ヲ原告ヨリ吾ガ物ナリトテ之レヲ已レニ取戻サントト訴ウル時原告ハ其訴訟ノ間ニ被告ガ此不動産ヲ破損スルカト恐ルヽガ故ニ假リニ其不動産ヲ被告ノ手ヨリ引取リ訴訟ノ曲直判決アルマデハ之レヲ他人ニ付託シ置キタシト願ウヲ得（民法千九百六十第二項見合一条）ルナリ判事其願ヒヲ聞届ケ

吟味進歩ノ字ハ此文中ニ取ル

テ此保護ノ方法ヲ命ズ是レ保護ノ申渡シナリ

○故ニ保護ノ豫審ハ悉ク初メヨリ訴訟事件ヲシテ難ナク其局末ニ至ラシムル為メノ豫防法ニ関スルモノニシテ吟味手續ノ進歩ニハ少シモ関セズ是即チ余ガ將ニ下文ニ論ゼントスルガ如ク保護ノ豫審ト其他ノ豫審ト大ヒニ區別アル所ロナリ

進歩豫審トハ訴訟事件ノ吟味ヨリシテ其確審申渡ヲ受ク可キ點シデ進歩シ至ラシムルガ為メニ必用ナル手續ヲ申渡スモノナリ○然レ𪜈此申渡而已ニテハ未タ確審ノ決スル所其曲直何レニ在ルヤ得テ知ル可カラズ

前知ノ訳字ヲ此文中ニ取ル

アンテルロキユトワール（曲直ノ前知豫審）モ同ジク之レ訴訟ノ確審ヲ受ク可キ點ニ進歩スルガ為メ必用ナル吟味手續ヲ命ズルモノト雖𪜈其性質自カラ確審ノ將ニ決セントスル曲直ヲ前知セシムルモノナリ

プレパラトワールノ申渡モアンチルロキユトワールノ申渡モ其各々訴訟吟味ノ進歩ヲ見

的ト為ス所ヲ以テ考ウレバ兩ナガラ性質ノ同一ナルモノアリト雖モ其一ハ訴訟ノ曲直ニ關シ其一ハ之レニ關セサルヲ以テ看レバ其性質マタ能ク區別ス可キ所アリ

書面上ノ吟味（訴訟法九十五条以下）裁判役ノ評議（同九十三条）又ハ延期ヲ申渡ス豫審ハ皆プレハラトワールノモノナリ何トナレハ其訴訟ノ曲直ニ付テ判事ノ見込如何ハ此申渡ヲ以テ考ウルトモ少シモ知リ能ワサレバナリ

警言ヲ申渡スモノハ其訴訟確審ノ將サニ決セントスル所ロ是レニ依テ已デニ明瞭ナルガ故ニアンテルロキユトワールノ豫審ナリ即チ民法ユード千三百六十一条ノ文ニ「警」ノ求メヲ受ケシ者ハ其警ヲ肯セズ又ハ其求メヲ為シタル者ニ反シ警ヲ求メザル時ハ已レ其訴訟ノ曲者トナル可シ○警ヒヲ求メタル者ハ相手方ヨリ反シ警ヒノ求メヲ受ケテ之ヲ立ツルヲ肯セサル時ハ此者亦訴訟ノ曲者トナル可シトアリ

プレパラトワール「アンテルロキユトワール」

トノ區別ハ大切ナル係ヲ起スモノニシテ後ニ四百五十一条四百五十二条ニ至リテ明細ニ之レヲ論説ス可シト雖ドモ今先ヅ茲ニ之レヲ約言スルニ「アンテルロキユトワール」ノ申渡ニハ直チニ之レヲ控訴スルヲ許スト雖ドモプレパラトワールノ申渡ニ對シテハ確審申渡ヲ受ケタル後ニシテ確審トプレパラトワールト二箇ヲ一集ニ控訴スルニ非サレバ控訴ヲ許サザル「ノ遠ヒアルナリ

ムールロン氏著訴訟法（パーヂュ二七九）

第十六卷附帶ノ事

○

訴訟ノ手続ニ二様アリ

曰ク　通常ノ手続　オルヂナール

曰ク　アンシダンノ手続

○

通常手続ノ訴訟ハ

一呼出状 アジヨウールヌマレ○五十九條ヨリ七十四條マテ

一代書人ヲ任スルヿ、答辯及ヒ再答
七十五條ヨリ八十二條

一検事ヘ報告スル事 此手続ハ訴訟中ニ検事ヘ報告ス可キ事故アル時ニ限ル○八十三條ヨリ八十四條マテ

一書面ニ依テ吟味スルヿ 此レモ場合ニ依ル○九十五條以下

一裁判役ノ評議 九十三條以下

一裁判申渡 百十六條以下

ヲ以テ其局ヲ結フ

○

アンシダン手続ノ訴訟ハ凡ヘテ何事ニ限ラス一件訴訟ノ際ニ入リ来リ或ハ其吟味ノ手続ヲ中止シ其進歩ヲ障碍シ或ハ其論題ノ箇條ヲ増加シ以テ吟味及ヒ申渡ヲ幾分カ混雑多端ニ至ラシム○所謂アンシダンノ手続トハ第九章ニクセフシヨン(訴訟ノ故障ヲ述フル事ト譯ス百六十六条ニ此字アリ)ニ始マリ間断ナク第二十三章デジストマン(原告人故ラニ其訴訟ヲ止ムルヿ)ニ終ルナリ

アンシダンノ字ハ羅甸語 井ニ、井デレヨリ変シ其意中断スルニ在リテ凡ヘテ訴訟一件通常手續ノ

進歩ヲ中斷スル事件ハ皆如斯名付可シ故ニ

第一 関轄違ヒノ（デクリナトワール）故障訴訟類

取消ノ故障（プロランプトワール）猶豫ノ權ヲ云

立ル故障（デラトワール）ノ如ク惣ヘテノ口

クセプシヨン（故障ヲ云立ツル）

第二 書類驗真（ヴイリヒカシヨン）書類贋造ヲ添

ヘ訴ウル（百九十三条以下）

（二百十四条以下）証人吟味（アンケート）二百

五十二条 実地検査（デサントー）鑒定人ノ

（二百九十五条）

申立（ヨキスペル）三百二條 本人問紀（アンテロガトワール）

（三百二十四条）

双方ノ對席、誓言ヲ求ムル事

ノ如ク訴訟人ヨリ論題ノ証拠ヲ立ツルカ為

メニ為スヲ得ヘキ種々ノ方法

第三 新規ノ願件ニシテ是迄ノ訴訟ノ境界ヲ

廣クスルモノ（三百三十七条ヨリ三百四十一条マテ）

第四 訴訟ヲ再起スル事及ヒ吏ニ代言師ヲ任

スル事（ヨルプリーヅー三百四十二条ヨリ三百五十一条マテ）

第五 代書師權外ノ処置ヲ行フタルニ依テ本

人ヨリ其処置ヲ取消サレトスルノ願件（三百五十二条ヨリ三百六十二条マテ）

第六 判事ヲ取替ヘル訴（レーグルマンー三百六十三条ヨリ三百六十

七条マテ親属或ハ姻属ノ故ヲ以テ裁判所ヲ取替ユル訴（ラニヴワーブルユーズ三百六十八条ヨリ三百七十七条マテ）レキユザシヨン（三百七十八条ヨリ三百九十六条マテ）

第七ペーラプシヨン（原告人定期ノ時間訴訟ヲ停止スルニ因リ其訴訟ノ手続キヲ取消ト為スヿ三百九十七条ヨリ四百一条マテ）デヂストマン（四百二条ヨリ三条原告人故サラニ其訴訟ヲ止ムルヿ）

以上七種ノモノハ悉皆アンシダン（中断ノ訴訟ト云フ可シ）

○

然リト雖トモアンシダンノ字義ヲ今一層狭ク取リテ所謂論題ノ境界ヲ廣クスル新規ノ額件（前文ノ第三ノ部ヲ見ヨ）而已ヲ指シテ法律中別段ニ之レヲアンシダント稱スル事アリ是レ則該巻（第十六巻云フ）題目ト為ス所ナリ○訴巻ノ内ニ於テモ第一款ノ附帯ノ訴訟（アンシダン或ハアヂシヨナール）ハ其本来ノ原告人ヨリ出スモノナリ○第二款ノアンテルバンシヨン（他人主タル訴訟ニ管渉スル事）トハ外人ヨリ之レヲ出スモノナリ○又本来ノ被告人ヨリ之レヲ出ス時ハ之レヲレコンバンシヨナール（返リ公事ノ意ナリ）ト名付ハ

ツク（四百六十四条ヲ見ヨ）

高等院オート、クール

高等院ノ制ハ中程ノ者ニシテ法官ト陪審トニ依テ成レリ此ノ制ハ第二共和政事（千八百四十八年）ノ時ニ始マレリ

第二帝国ノ時（千八百五十二年）ニモ之ヲ保存セリ（千八百五十二年ノ建国法（コンスチチュシヨン）及ヒ千八百五十二年七月十日元老院議決書（セナチユスコンシユルト））而シテ其管轄ヲ廣闊ニセリ（千八百五十八年六月四日元老院議決書）

其著大ナル管轄ハ国ノ内外ノ安寧ヲ害スル重

罪ヲ判決スルニ在リ（千八百五十年建国法第五十四条）

千八百五十八年以後ハ国事犯ナリ常事犯ナリ

皇族各省ノ卿貴顕ノ位階アル者公使元老院議員及ヒ参議ノ犯クス所ノ重罪及ヒ軽罪ハ高等院ニ於テ之ヲ判決ス

然リト雖ヒ何レノ場合ニ於テモ高等院ノ管轄ヲ以テ全ク通常裁判所（重罪裁判所及ヒ懲治裁判所）ノ管轄ヲ除却スルニ非ラス即チ皇帝ノ勅令アルニ非サレハ高等院ニ出訴スルヲ得ス実際ニ於テハセーヌ州ノ重罪裁判所ニ於テ

皇帝ヲ弑スルノ罪ヲ裁判セシコトアリキ

固ヨリ高等院モ通常ノ法（刑法及ヒ別段ノ法）ヲ当行スル所ナリ他ノ諸裁判所ト同様ノ法ヲ当行ス

囲中兵政（エタード・メージュ）ノ布告アルモ高等院ニ於テ裁判スルニ妨ケナシ高等院ノ管轄ヲ止メ軍事裁判所ニ於テ管轄スルノ場合ハ軍制ニ背キテ高官ノ者或ハ華族ノ重罪軽罪ヲ犯カセシ者ヲ訴フルノ場合ノミナリ然リト雖モ軍事裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルハ猶リ囲中兵政ノ時ノミナラス假令

ヒ国中兵政ノ時ニ非ラサルモ此事柄ハ軍事裁判所ニ於テ之ヲ扱フ

高等院ヲ設クル法律

帝国ノ時ニハ官ノ威権強大ナリト雖モ猶ホ皇帝ノ勅令ノミニテハ十分ナラス必ス元老院ノ議決書ナカルヘカラス

元老院ニハ又タ固有ノ職掌アリ(建国法ヲ改革シ殖民地及ヒ殖民地ノ制設ヲ扱フ)高等院ノ管轄ハ建国法ノ定ムル所ナリト雖モ元老院ニハ此管轄改革ノ事ニ付テハ建国法ヲ改ムルノ権アリ

法元老院議決書及ヒ帝王ノ勅令ヲ布告スルノ式ハ各書ニ記スル規則ノ事柄ハ何様ナルモ皆ナ同一ノ体裁ナリ

法ノ布告ノ式ハ左ノ如シ

拿破崙万民ノ為メニ現時及ヒ後来ノ人ニ告ク(或ハ共和政治大頭領云々々々)

立法院ノ會議及ヒ元老院ノ會議ニ因リ何年何月何日何々ノ事ニ付キ(法或ハ元老院議決書ノ題号事柄ヲ記ス)左ニ記スル所ノ法(或ハ

元老院議決書ヲ既ニ制裁セリ又後来之ヲ制裁スヘシ既ニ之ヲ布告セリ又後来迄モ之ヲ布告セン

法文何々々々

大頭領ハ制裁スルヿナシ只布告ト云フノミ

勅令ノ書式

拿破崙萬民ノ為メ云々（或ハ大頭領云々）

何々ノ法ニ付テ（其法執行ノ細目ヲ鮮明スル所ヲ記ス）其執行上云々ノ事ヲ要スルニ依テ左ノ如ク既ニ決定セリ而シテ後来ハ此決定ニ由ラシムヘシ

閣中兵政ノ布告

皇帝（或ハ大頭領云々）

今度何々ノ州ニ於テ国内ノ安寧ヲ害シ平和ヲ妨クヘキ容易ナラサル騒動是レアルニ付キ千八百四十九年ノ法ニ由リ何々ノ州ヲ以テ閣中兵政ニ在ル者ト決ス

軍事裁判所ノ管轄ノ諸効ハ千八百四十九年ノ法ニ之ヲ規定セリ

軍事裁判所ヲ増設スルヲ要スルキハ先ツ撿視

シテ新決按ヲ以テ是レヲ指令ス

軍事裁判所ノ管轄

軍事裁判所ニテハ屢〻通常ノ刑法ヲ当行ス（軍律第百九十九条二百二条二百六十七条等）法官ノ職ニ在ラサル者ノ為メニハ軍律ノミヲ当行スルハ甚タ難キヿナリ

然リト雖ヒ法ノ当行ヲ誤ルヿアルモ大審院ニ上告スルヿナシ管轄上ノ上告ニ非ラサレハ大審院ニ出訴スルヲ得ス（是レ軍人ナラサル人ノ軍事裁判所ノ管轄ヲ肯ンセサルトキニ在ルヿナリ軍律第八十条及ヒ第八十一条ヲ見ルヘシ）

然レヒ軍律再検裁判所（コンセーユドレヴィジラン）ナル者アリ其職員ハ皆軍人ナリ而シテ大審院ノ事ヲ行フ上告ヲ為ス（第七十二条ヨリ第七十四条是レ又不当ノ事ナリ）

然レヒ政府（コンセールドグーヴルヌマン）ノ月代ナル者（軍事ノ検事）及ヒ代言人アリテ能ク法ノ当行ヲ容易ナラシム法ノ意味ニ付テ異論アルヿナリト雖ヒ其裁判官ハ能ク法ノ真意ヲ探知スルヲ得可シ

然レヒ是レ皆至当ノ道理ニ適セサルヿナリ余ヲ以テ是レヲ見ルニ法ノ当行上ノ事ハ大審院

ニ之ヲ管理セシムヘキナリ

ボワソナード氏口述ノ譯

先年獨佛戰爭ノ際巴里府内外ニ暴徒起リタル時原ヨリ該地ハ戰政ノ郭内ニ位スルヲ以テ暴徒ノ事ハ惣ベテ軍事裁判所ニテ裁判ス軍事裁判所ハ巴里ヲ去ル五里ニシテベルサイユト云ウ地ニ在リ其數最モ多キ時ハ二十二ヶ処ニ至ルト云ウ戰爭終リ暴徒治ル此間一年半トス ノ後尚オ四年ノ間ハ戰政ヲ止メズ其間常ニ軍事裁判所アリ、戰政既ニ終リ今日ニ至リテモ尚オ軍事裁判所ニ三ヲ設置キ暴ニ暴徒ニ関セシ犯人

アレバ時ニ臨ンデ裁判ヲ開クナリ

戰政ノ間ハ軍人ノ犯罪モ平人ノ犯罪モ皆軍事裁判所ニテ受理ス、但シ軍務長官ノ指令ニテ平人ノ犯罪中、事軽キモノハ務メ其ケ条ヲ定メ司法ノ裁判所ニテ裁判セシム尤モ民事ノ訴訟ハ依然司法判事局トスル處ナリ

行政部ノ常務ハ縣令ノ（司サ）エ十ヤドル所ナリ但シ警察ノ事ハ悉ク軍人ノ権内ニ移ツルナリ

戰政ヱタ「ド」シヱージュ

戰政トハ國事警察ノ一挙ヲ以テ臨時ニ平常ノ法律ヲ中止シ萬機ヲ軍人ノ権柄ニ委託スルヿナリ○戰政ノ法則ハ載セテ

千七百九十一年七月十日ノ法令

共和第五年結葉月十日ノ法令

千八百十一年十二月二十四日ノ勅令

千八百四十九年八月九日ノ勅令

ノ上ニ在リ○凡ソ戰政ノ地方ニ於テハ司法裁判ヲ止メテ専ハラ軍属評事ヲシテ裁判事務ヲ

司ドラシム、故ニ晝夜ト無ク人民ノ家屋ニ侵入シ犯人ヲ探索シ、無宿不頼ノ悪漢ヲ退治シ、兵器ヲ剥奪シ、新聞雑誌及ビ人民ノ集會ニシテ国安ヲ害スル者之レヲ禁止スル等皆軍人ノ権ニ在リトス

在巴里府控訴院ノ管轄ニ施行ス可キ

民事入費定額

千八百七十年二月十六日布告ノ勅書

○第一篇　治安裁判所（千八百四十五年ノ六月二日ノ法ニテ第一条ヨリ第二十条迄ノ改ム此法後ニ見ユ）

第一章　治安裁判官ノ職掌及ヒ其時間ニ付テ入費人定價

第一条ヨリ第八条マテ

第二章　治安裁判所ノ書記官ノ入費定價

第九条ヨリ第二十条マテ

第三章　治安裁判所ノ伏吏入費定價

第二十一条ヨリ第二十三条マテ

第四章　証人評價人封印物ノ番人ニ付入費

定價

第二十四條ヨリ第二十六条マテ

○第二篇　初告并ニ控訴裁判所

第一卷　通常伏吏ノ入費定價

第一款　上等ノ書类

第二十七条ヨリ第二十九条マテ

第二款　下等書類

第三十条ヨリ第六十五条マテ

第三款　伏吏ニ関スル惣規則

第六十六条

第二卷　初告訴ノ代書人

第一章　至急吟味（訴訟法四百四条以下）ノ事件

第六十七条

第二章　通常吟味ノ事件

第一款　手談ノ謝金

第六十八条第六十九条

第七十条　第二款　上等ノ書類

第七十一条　第三款　下等ノ書類

第七十二条ヨリ七十五条マテ　第四款　願書答辯書并ニ其副本

第七十六条ヨリ七十九条マテ　第五款　願書、、、

第六款　訟廷ノ代言及ヒ付添

第八十条ヨリ八十六条マテ

第七款　始末書及ヒ裁判申渡ノ送達

第八十七条ヨリ八十九条マテ

第八款　時間ヲ用ユルニ付テノ謝金

第九十条ヨリ九十四条マテ

第九款　コントリビュシヨン　訴訟法六百五十三条ノ手續

第九十五条ヨリ百一条マテ

第十款　不動産差押ヘノ手續

第百二条ヨリ百二十九条マテ（千八百四十年十月十日ノ布

告ヲ以テ此數ケ条ヲ廢ス

第十一款　オルドル（訴訟法第七百五十条）ノ手續

第百三十条ヨリ百三十九条マテ

第十二款　其他特別ノ書類

第百四十条ヨリ百四十六条マテ

第三章　巴理府控訴院ノ代言人

第百四十七条ヨリ百五十条マテ

第四章　控訴院ノ代言人及ヒ初告ノ代書人ニ用ユ可キ規則

第百五十一条

第五章　訴廷付ノ使吏

第一款　初告裁判所

第百五十二条ヨリ百五十六条マテ

第二款　巴理府控訴院ノ訴廷付ノ使吏

第百五十七条ヨリ百五十八条マテ

第六章　評價人書類ノ預リ人、証拠人

第百五十九条ヨリ百六十六条マテ

第七章　公証人

第百六十八条ヨリ百七十五条マテ

終リ

○不動産ヲ裁判所ニテ賣拂ウ手続ノ入費定額

千八百四十一年十月十日布告ノ勅書

○

第一卷　全帝国内ニ用ユヘキ規則

第一章　初告裁判所ノ書記官

第一条

第二章　「井ポテーキ」管者

第二条

第二卷　在巴理府控訴院管轄地内ニテ施行スヘキ規則

第一章　使吏

第一款　通常ノ使吏

第三条ヨリ第五条マテ

第二款　初告裁判所ノ訟庭付ノ使

第六条　吏

第二章　初告ノ代書人

第一款　賣買ノ各種ニ付各異ノ定額

第七条　不動産差押ノ事

第八条　随意賣買入札ノ事

第九条　幼者財産ノ賣買ノ事

第十条　財産分派

第二款　各種ノ賣買ニ通シテ用ユ可キ定額

第十一条　ヨリ十三条マテ

第三章　公証人

第十四条

第四章　評價人

第十五条

第三卷　巴里ノ除キ他ノ控訴院各管轄地内ニ用ユル規則

第十六条

第四卷　總規則

司法省

第十七条ヨリ二十条マテ

終

○千八百五十四年五月二十五日勅書初告裁判所并ニ控訴院ノ書記官民事及ヒ商事ヲ取扱フ手数料ノ定メ

第一章　初告民事裁判所書記官ノ手数料

第一条ヨリ三条マテ

第二章　商事ヲ兼務スル初告裁判所ノ書記官ノ手続料

第四条ヨリ五条マテ

第三章　控訴院書記官ノ手

第六条ヨリ第七条マテ

第四章　總規則

第八条ヨリ第十三条マテ

終リ

第一篇

一人ノ身分及ヒ品位ノ事

總規則

第一卷　内外人ノ民權ヲ有シ且ツ之ヲ行フ事

第一節　内國人民ノ民權ノ事

第二節　外國人民ノ民權ノ事

第二卷　國人タル分限ノ事

第一節　本國人タルノ分限ノ事

第二節　法律上ニ於テ得タル分限ノ事

第三節　歸化ノ事

第四節　國民タルノ分限ヲ失フ事
第三卷　嫡子及ヒ私生ノ子タル事
第一節　嫡子タル事
第二節　私生ノ子タル事
第三節　姦通及ヒ乱倫ノ子タル事
第四卷　養子ノ事
第一節　養子ヲ為ス身位ノ事
第二節　粮子ヲナス法式ノ事
第三節　粮子ヲナスニ付テ生スル諸件ノ事
第四節　養子ヲナスニ付テ證據ノ事
第五卷　親ノ權ノ事
第一節　教育ノ權ノ事
第二節　省誡ノ權ノ事
第三節　入額ノ所得ノ權ノ事（第四卷ニ詳カナリ）
第四節　婚姻及ヒ養子ノ許可ノ事
第五節　親ノ權ノ終ル事
第六卷　後見人及ヒ後見（イマシヒトヒ）ノ事
第一節　幼者ノ後見ヲ解ク人ノ事
第二節　後見ヲ解キタル者ノ管財（キヨウテール）人ノ事
第七卷　婚姻及ヒ離婚ノ事

第一節　婚姻ヲ為スヿ可キ身位ノ事
第二節　婚姻ノ法式ノ事
第三節　婚姻ノ証據ノ事
第四節　婚姻ヨリ生シタル諸件ノ事
第五節　婚姻解約ノ事
第八卷　住所ノ事
第一節　住所（其首タル住所ノ地ヲ言フ）事
第二節　ドミシール（ドミシールヲ撰ミタル住所ヲコレヲドミシールトイフ）
第三節　撰ミタル住所
第九卷　失踪ノ事
第一節　失踪ヲ思度スル事
第二節　失踪ヲ出訴スル事
第三節　失踪ノ消滅スル事
第十卷　瘋癲ニ付治産ノ禁事（浪費者ニ付ルヿ）（裁判所ヨリ後見人ヲコレヲ）
第一節　瘋癲ニ付治産ノ禁事
第二節　裁判所ヨリ浪費者ニ後見人ヲ付ル事
第十一卷　法律上ニ於テ治産ノ禁事及ヒ軽重罪ヲ犯シタルニ付裁判上ニ於テ治産ノ禁事
第一節　法律上ノ治産ノ禁事
第二節　軽重罪ヲ犯シタルニ付裁判上ニ於テ治産ノ禁事

第十二巻　身上証書ノ事
第一節　出産ノ証書
第二節　私生ノ子ヲ嫡出ノ子ト認ムル証書
第三節　養子ノ証書
第四節　婚姻ノ証書
第五節　死去ノ証書
第六節　身上証書更改等ヲ記載スル事
第二篇　物権及ヒ人権ノ事
第一部　物権ノ事
第一巻　動産及ヒ不動産所有権ノ事
第二巻　所有権ノ事
第三巻　永年期契約書（但シ家屋借貸ノ契約書ニシテ九十九年迫続キ得ル所ノ者也）
第四巻　入額所得ノ権（コザージュ）（他人ニ属スル財産ヨリ生スル利益中ニシテ己レニ必要ノ部分ヲ所得トナス）
第五巻　土地ノ義務（土地ノ義務トハ一ノ所ニ属スル不動産ノ使用及ヒ便利ノ為メ他ノ不動産ニ属スル義務ヲ云フ）（アビタシヲン）（他人ニ属スル家屋ニ住スヘキノ権ノ事）（一身ノミニ属スル権）
義務且ツ抵当物ニ係ル諸件ハ第四篇ニ譲ル
第一　貢物ノ事（質物ト負債者其債ヲ償フ可キ保証トシテ其債主ニ物件ヲ渡ス契約ヲ云フ）
第二
第三　不動産ノ質ノ事
第四　債主ノ特権（一ノ債主他ノ債主ニ先タチテ償還ヲ得ルノ特権ヲ云フ）及ヒ（イポテー